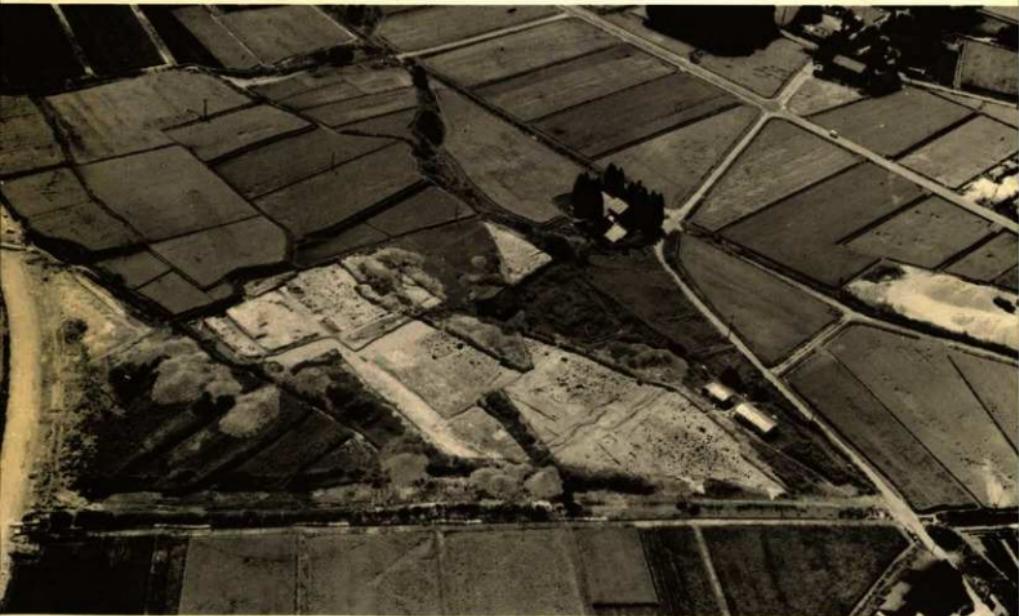


富山県上市町

弓庄城跡

第5次緊急発掘調査概要



1985年3月

上市町教育委員会

序

上市町では町の南部、柿沢・館地内において行われた団体営ほ場整備、並びに、県営ほ場整備に先立ち弓庄館城跡の発掘調査を実施しました。

城跡は古くからの言い伝えや付近で採集される遺物などからその存在は認められていきましたが、本丸跡を中心とする地域だけがその範囲であると考えられてきました。ところが発掘調査の結果、その範囲は南北約600m東西約150mの大規模なものであることがわかりました。また出土遺物が鎌倉時代から室町時代までの長期間にわたるところから、築城以前にすでに人々の生活がこの地で営なまっていたことが明らかになりました。

出土した遺物は、全国各地で焼かれた陶磁器、中国製の磁器のほか、当時の生活を偲ばせる木製品、鉄砲の弾、鎧片、刀片、小柄などの武具と多種多様でした。これらは当時の生活ばかりではなく、物資の流通や弓庄の城兵の様子をも物語ってくれました。

調査は昭和55年から本年昭和59年までの5ヶ年を費し終了しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るものとして活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大な御協力をいただきました県農地林務部、上市南部土地改良区、県教育委員会、並びに地元住民のみなさまに衷心より感謝申し上げます。

昭和60年3月

上市町教育委員会

目 次

序	図版24	C地点4区遺構
例言	図版25	C地点5区遺構
I 遺跡の環境	図版26	C地点6区・C地点7区遺構
第1図 地形と周辺の遺跡	図版27	C地点3～7区遺構
II 調査の経過	図版28～29	C地点3～7区遺構
第2図 地形及び区割図	図版30～33	C地点3～7区出土遺物 珠潤、越前、瀬戸、美濃
第3図 C地点3～7区遺構配置図	図版34	C地点3～7区出土遺物 青磁、白磁、染付
第4図 弓庄城跡周辺の小字名	図版35	C地点3～7区出土遺物 金属製品
III 調査の概要	図版36～38	C地点3～7区出土遺物 石製品、土製品
1. C地点3区	図版39～42	C地点3～7区出土遺物 木製品
2. C地点4区	図版43～44	C地点3～7区出土遺物 土師質皿
第5図 SK1149遺構図	図版45	弓庄古城之図（土肥家記より）
IV 調査の成果		例 言
1 出土遺物による時期区分	1.	本書は、県営ほ場整備事業（上市南部地区）に伴う富山県中新川郡上市町弓庄館城跡の第5次緊急発掘調査機要である。調査は、昭和59年4月16日から同年9月7日までである。調査面積は5700m ² である。
第7図 弓庄Ⅰ・Ⅱ期の土器	2.	調査は上市町教育委員会が、富山県農地林務部の委託を受け実施した。地元負担金については、上市町教育委員会が国庫補助・県費補助金を受けた。調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。
第8図 弓庄Ⅲ・Ⅳ期の土器	3.	調査事務局は上市町教育委員会にあり、調査期間中文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務は、社会教育課主事高慶孝が担当し、社会教育課長荒川武夫が総括した。
第9図 弓庄Ⅴ期の土器	4.	調査は上市町教育委員会社会教育課主事高慶孝、県埋蔵文化財センター文化財保護主事神保孝造・宮田進一・久々忠義（以上調査担当者）・上野章・狩野睦（以上調査員）が担当した。
第10図 弓庄Ⅵ・Ⅶ期の土器	5.	遺物の整理。本書の編集・執筆は、県埋蔵文化財センターの協力を得て調査担当者が行った。執筆分担は各々の本文に記した。なお、陶磁器に関しては、名古屋大学植崎彰一先生から御教示を得た。記して謝辞としたい。
2 遺構について	6.	遺構番号の頭の分類記号の意味は次のとおりである。 SA:塗, SB:建物, SD:溝・堀, SK:穴, SS:道路, P:柱穴
引用・参考文献		
第11図 主な遺構の時期別分布		
図版1 C地点3～7区発掘区		
図版2～4 C地点3区出土遺物		
図版3 遺構土層セクション		
図版5～9 C地点4区 SD1002出土遺物		
図版10～12 C地点4区出土遺物		
図版13 C地点5区出土遺物		
図版14～17 C地点6区 SD1001出土遺物		
図版18～20 C地点6区出土遺物		
図版21 C地点7区出土遺物		
図版22 弓庄城跡航空写真		
図版23 C地点3～7区全景・C地点3区遺構		

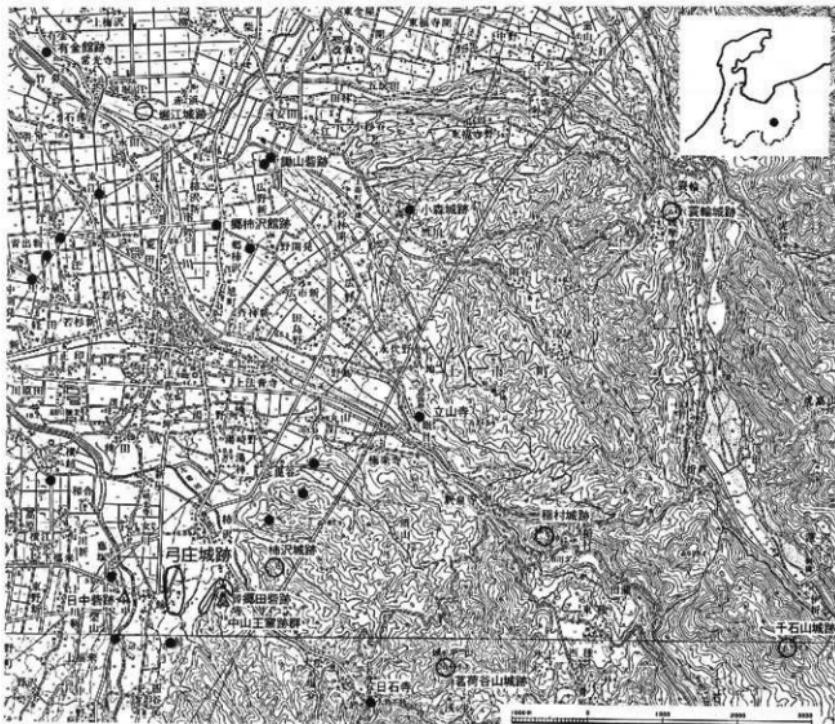
I 遺跡の環境

弓庄城跡は、富山県中新川郡上市町館地内にある。西方約500mに白岩川が北流し、東方約500mには標高150～200mの丘陵がせまる。城跡は白岩川が形成した幅約200mの河岸段丘上の最も奥まった所に立地し、西側が比高差約10mの段丘崖に面する。標高は40～60mで北へ向って下り、北方約10kmにある富山湾を一望できる。

弓庄城の成立の時期に関しては諸説あるが、鎌倉時代に上市川流域の堀江荘の代官職として成長を遂げていた土肥氏の一族が南北朝時代末期以後隣りの井見荘へ進出して成立したものと考えられている〔石原1977、久保1983〕。城は天正10年(1582)に城主土肥政繁の時に、織田方の武将佐々成政に攻められ守りきれず、以後廃城となつたらしい。日中裕、郷田哲はこの時の佐々方の砦、柿沢城・若荷谷城は土肥方の詰城と考えられている〔高岡1983〕。

城跡は全面水田化されていて、現状から当時の様子をうかがうことはむずかしい。そのため調査は江戸時代に画かれた「弓之庄古城図」(土肥家記付図)を現地形にあてはめて、その確認を第一の目的として行ってきている。その結果 井見荘の前身と考えられている日置莊内の一村落とみられる13世紀代の建物群や、弓庄城に関連づけられる16世紀代の溝や建物群などが検出され、古絵図にあらわれている以外の遺構も次々と発見されている。弓庄城成立の時期やその契機、城館の形態や生活の諸相などまだ不明な現状にあるが、発掘調査によって得られた資料の分析を通じて、それらの問題もやがて明らかにされていくものと考えられる。

(久々)



第1図 地形と周辺の遺跡

II 調査の経過

町指定文化財、弓庄館城跡は（以下弓庄城跡）、上市町柿沢・館両地区にまたがる中世の平山城である。同地内は昭和53年度から昭和56年度までの団体営ほ場整備事業、次いで昭和56年度から昭和59年度までの県営ほ場整備事業が年次的に実施された。昭和55年度以降これらのは場整備事業が城跡に計画されたため、城跡保存のための協議が、上市町教育委員会・富山県教育委員会（文化課・県埋蔵文化財センター）・県農地林務部（ほ場整備課・富山農地林務事務所）・上市南部土地改良区の4者によって行われた。その結果、一部記録保存を含む現状保存の対策が講じられることとなり、以後5ヶ年に亘り調査が行われた。

1. 第1次調査（昭和55年度）

第1次調査は、団体営ほ場整備地区南側約30万m²を対象として行った範囲確認調査（第1期調査）と工事計画との調整上やむなく発掘調査を実施した第2期調査に分けられる。第1期調査では対象区のほぼ全域で遺構・遺物を検出した。遺構では、堀・井戸・建物・溝を確認した。第2期調査では建物・溝・井戸・土塙・柵を検出した。遺物では、瀬戸・美濃・越中瀬戸・珠洲・伊万里などの陶磁器類、土師質土器、中国製磁器、鏡片などが出土した。なお調査は、第1期調査、第2期調査を合わせ2,500m²であった。

2. 第2次調査（昭和56年度）

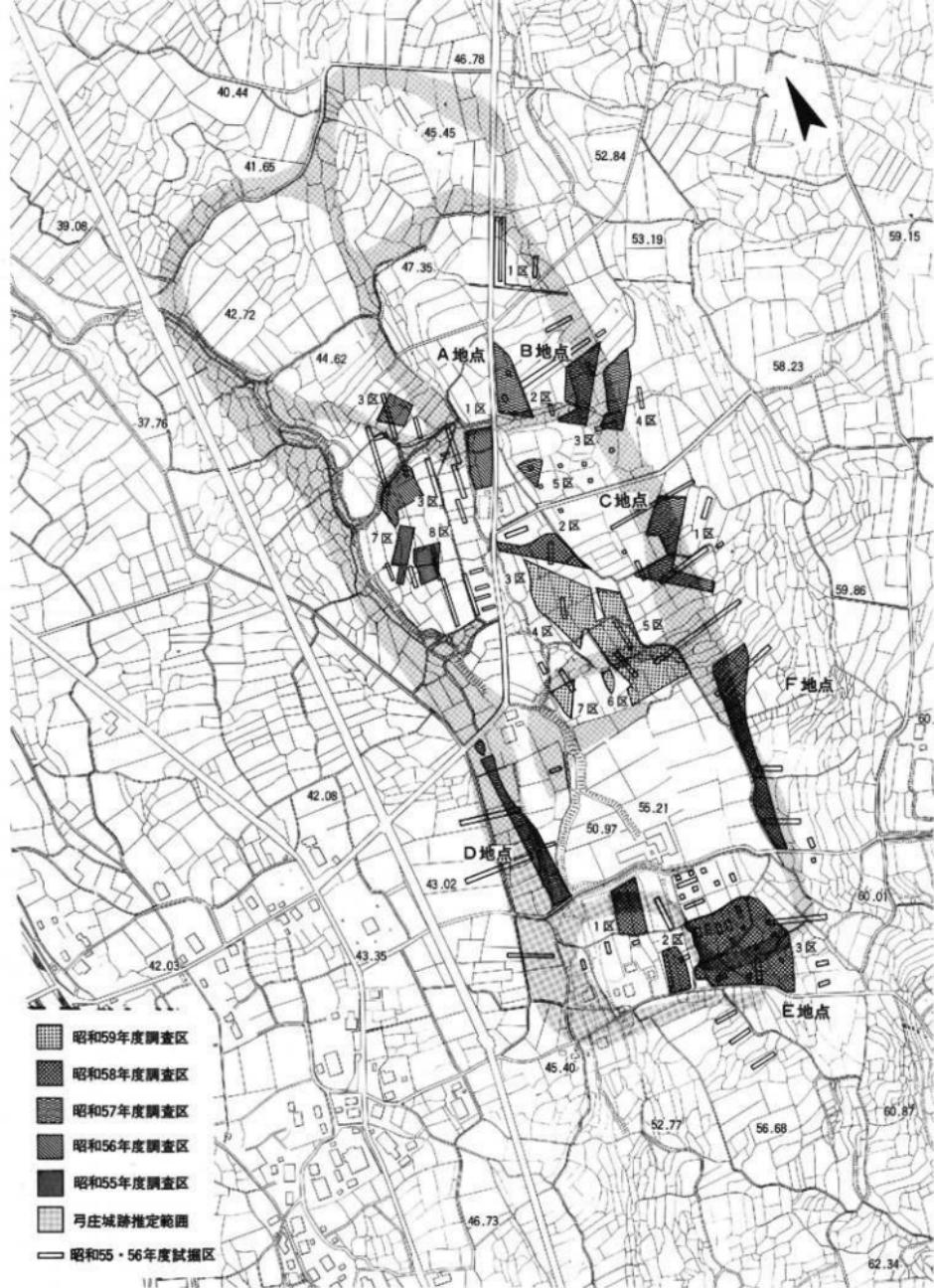
第2次調査は、白岩川の河岸段丘上の約1,300m²を対象とした第1期調査と城跡全体の範囲確認を目的とした第2期調査に分けられる。第1期調査は城跡西側外郭部分に比定される地区で、工事計画上、記録保存を要する部分に調査区を設定し全域で遺構・遺物を検出した。遺構では、建物・井戸・溝・土塙、遺物では瀬戸・美濃・越中瀬戸、珠洲、土師質土器、中国製磁器が出土した。第2期調査では、城跡推定範囲の外堀を中心にして、1×20m・1×50m・1×100mのトレンチ及び1×1mの試掘坑を設定し、それぞれ遺構・遺物の確認を行った。その結果、一部擾乱を受けた部分があるもののほぼ全域にわたって、遺構が残存しており、遺物も瀬戸・美濃・越中瀬戸・越前・珠洲・伊万里・中国製磁器のほか、木製品、金銀製品なども多数出土した。またこの結果から城の郭を復原すると（第2回参照）『上肥家記』（有沢永貞著、金沢市立図書館蔵）の付図「弓之庄古城之図」（以下古絵図という）にその配置が一致することが明らかになった。これにより城の規模は約90,000m²であることが確かめられた。

3. 第3次調査（昭和57年度）

第3次調査は、第2次調査で地区割りしたD地点、B地点2・3区、縄文時代中期の館窯削造跡を調査した第1期調査と、B地点4・5区、C地点1区を調査した第2期調査に分けられる。第1期調査ではD地点で全長約150mの土塙とそれに伴う堀、本丸から三番目の郭に比定されるB地点では、建物、溝、道路などの遺構を検出した。C地点は本丸から2番目の郭に比定され建物、溝を検出した。遺物では瀬戸・美濃・越中瀬戸・珠洲・伊万里・土師質土器・中国製磁器、下駄・人形・箸・ヘラ・曲物などの木製品、小柄・かんざし・銅錢などの金属製品、石臼・るつぼなどの石製品を出土した。なお調査面積は、第1期・第2期調査を合わせ約6,100m²であった。

4. 第4次調査（昭和58年度）

第4次調査は、C地点2区、E地点1・2・3区を調査した第1期調査と、F地点を調査した第2期に分けて行ったが、用水工事に伴って発見された中山王古窯跡の立ち合い調査も合わせて実施した。調査区のC地点2区は本丸から2番目の郭、E地点は本丸南側の郭、F地点は本丸東側の竜ヶ池と古絵図にある地区に比定された。遺構では、各地点で建物、井戸、堀、溝が検出されたほか、E地点3区で墓跡と思われる土塙が検出され、注目された。遺物では、瀬戸・美濃・珠洲・伊万里・中国製磁器、土師質土器などの陶磁器・土器類、馬形・クシ・将棋の駒、水舟・漆器の椀・柱根などの木製品、かんざし・小柄・銅錢などの金属製品、五輪塔・宝蓋印塔、茶臼・井戸枠などの石製品を検



第2図 地形及び区割図 (1/4,000)

出した。なお調査面積は、第1期・第2期調査を合わせて、8,200m²であった。

5. 第5次調査（昭和59年度）

調査は、昭和56年度調査で地区割りをしたC地点のうち、ほ場整備事業の施工上削平を受ける部分についてのみ実施した（第2図参照）。また、調査は3・4・5・6・7区の5地区に分けて実施した。調査は上市町教育委員会が富山県農地林務部の委託を受けて実施したが、地元負担金分については上市町教育委員会が、国庫補助金、県費補助金を受けて実施した。

C地点

C地点は、城跡本丸から二番目の郭に比定される地点で、標高52m前後の平坦な地点である。

3区 3区は今回の調査区の北側SD1230とC地点2区SD001によって区画される部分である。検出遺構は建物、溝、井戸、土塁などである。このうち井戸は2m前後の比較的深いものでいずれも素掘りであった。出土遺物は土師質土器、瀬戸・美濃、越中瀬戸、珠洲、中国製磁器、犬・火鉢などの上製品、すり臼・礎石などの石製品であった。

4区 4区はSD1131・1304・1003によって区画される部分である。検出遺構は建物、溝、井戸、土塁、集石造構である。この区画は東西53m以上、南北約20mの屋敷地と想定されよう。出土遺物は土師質土器、瀬戸・美濃、越中瀬戸、珠洲、伊万里、中国製磁器、上製品、金属製品、ヘラ・漆器の椀などの木製品である。このうち漆器の椀は8点出土し残存状況も良好であった。

5区 5区はSD1003・1002・1001によって区画される部分である。検出遺構は建物、溝、井戸、土塁、道路である。道路は幅1.5m前後のもので、柱穴・土塁群を区画する形で検出されている。出土遺物は、土師質土器、瀬戸・美濃、越中瀬戸、珠洲、中国製磁器、石製品、金属製品などである。

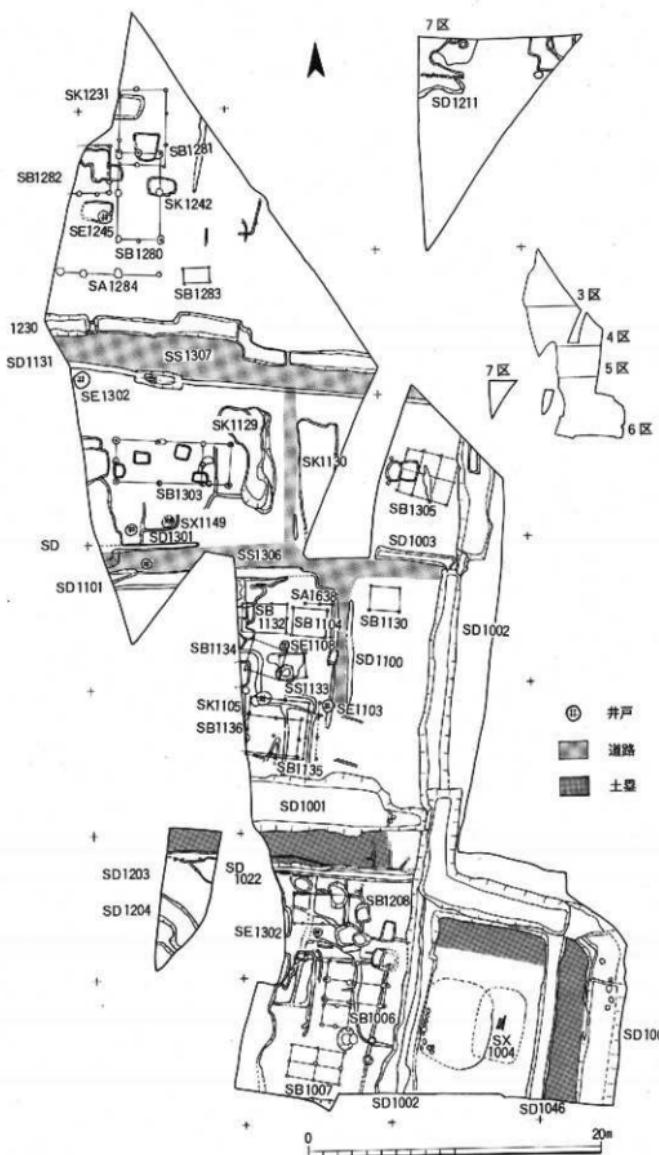
6区 6区はSD1001によって区画される部分で、城跡本丸の北側に位置する。検出遺構は建物、溝、井戸、土塁・石組造構である。このうち石組造構は、全体に火を受けた形跡があり炉跡であると考えられる。出土遺物は土師質土器、瀬戸・美濃、越中瀬戸、珠洲、伊万里、中国製磁器、土製品、金属製品、漆器、曲物などの木製品などである。このうち漆器は椀が多くSD1001から18点を出土した。

7区 7区は、城跡本丸北側で城のある河岸段丘の西端に位置する。検出遺構は溝とそれに伴う石組み、柱穴、土塁である。このうち溝は他の遺構より古い時期のものと考えられる。出土遺物は、土師質土器、瀬戸・美濃、越中瀬戸、中国製磁器、土製品、石製品などがある。

城跡内外の字名について（第4図・図版45）

城跡の状況を考える上で水田に残る小字が、1つの重要な手がかりとなる。字名と城の郭を対比してみると、「印場」は本丸跡で、大正の頃まで一部石垣が残っていたと云われている。「菜洗場」「曾祢」は本丸南側の郭で、調査では井戸や土塁が多く厨房的施設が想定された。「潜戸」は本年度調査したC地点にあたり、第二の郭に比定される部分である。潜戸という字は、本丸に向う時この郭を通らねばならないことから名づけられたものと考えられる。「長目」「曾祢」はB地点にあたり、第三の郭に比定される部分である。この他城外には、白岩川の水運の名ごりと思われる「舟付場」「入積場」がある。明治の前半では、白岩川を介した水運が残っておりそれを示すものと考えられる。かつて寺があったといわれる「万城寺」「寺尾敷」は、土肥氏とかかわりが深い館村の本教寺の前身があった地と伝えられている。字名としては残っていないものの現在も語り伝えられている地名に「ハリツケ田」がある。ここは、佐々成政との戦いの時、人質にとられていた土肥政繁の「男「平助」が隠に処せられた所といわれている。また城跡付近を流れる用水に「殿様用水」と呼ばれているものがある。昔から汚水を流すといけないと言われており、古城の図と照合しても弓庄城に水を引く用水であったのではないかと思われる。なお用水は暗渠である。

（高慶）



第3図 C地点3~7区構造配置図-1



第4図 弓庄城跡周辺の小字名 (S 1/5000)

III 調査の概要

1. C地点3区

C地点3区は三方を溝で区画された一郭の南半分を占める。南側を本地区のSD1230で、北側を昨年調査したC地点2区のSD001で区画されている。南北は約55mである。西側は段丘の崖で、東側は北流するSD1002で、区画されたと考えられ、東西は約80mと推測される。本地区は古絵図の言う本城より3m低く、標高52mである。

遺構（第1図、図版23・28）

遺構には掘立柱建物、溝、井戸、穴がある。16世紀のものが大部分である。

建物 復原できた建物はSD1230に直交あるいは平行に配置されている。SB1280は本調査区での中心的建物である。桁行2間(5.6+6.3m)、梁行1間(5.9m)の建物である。棟方向は南北で、N-90°-Wとなる。柱穴は長軸100~120cm、短軸80~100cmの長円形で、深さ90~110cmである。この柱間の広さと柱穴の大きさの点から、後述する弓庄Ⅳ期のうちでも最後の建物と考えられる。この建物の南側にはSA1284があり、門と堀のような通用施設と考えられる。ここを通て南に下るとSD1230を通る通路に至る。SB1281はSB1280に重複し、それより古いと考える。

桁行2間(5.3+5.2m)、梁行1間(6.2m)である。棟方向は南北で、N-6°-Wである。柱穴は30~50cmの長円形で、深さ40~50cmである。SB1280に接するようにSB1282がある。この建物は未調査区に係るため全容は不明であるが、桁行3間(2.6m+2.0m+1.8m)、梁行2間(1.8m+2.4m)以上の建物と推定される。棟方向は不明である。

溝 SD1230は幅2~3m、深さ40~100cmである。覆土には30cm大の石を多く含む。流れは西流で、東側と西側の溝底では1mの落差がある。溝は真直ぐでなく、途中でやや北側にまがって西流する。その曲口はC地点4区からの道の通路に利用されていたと考えられる。また、溝を渡る通路が明確に残っている所がある。それは長さ1.5m、幅70cmの土橋状になっており、地山を15cm掘り込み、SD1230の溝底とは20cmの落差がある。溝は貯水されていたことが判る。

井戸 本調査区ではSE1245しか検出できなかった。SE1245は直軸2m、短軸1.6mの長円形で、深さ2.2mである。大きく深い素掘りの井戸は弓庄Ⅳ期に属することから、SB1280との関連が考えられる。井戸の底からは16世紀の遺物が出土しているが、埋土中には網状に鉄錆のかかる越中瀬戸碗が見られることから、19世紀以降に完全に井戸が埋められたと推測できる。すなわち、廃城後も井戸は埋められず、使用されていることが予測される。

穴 SK1233・1236・1237は切り合がありSK1237→SK1236→SK1233に新しくなり、3時期に分かれる。

遺物（第2~4図、図版30~44）

遺物には上師質土器、珠洲、越前、瀬戸、美濃、越中瀬戸、青磁、白磁、染付、瓦質土器、土製品、金属製品、石製品、漆器がある。遺構から多く出土しているが、伊万里は少量で、遺構からの出土はない。大部分は16世紀である。

土師質土器 (1~16・49) 皿(1~16)は型押し・手づくね技法で作られている。形状は丸底で口縁部が外反するもの(1~3・5~7)と底部がやや平坦で、外反する口縁端部にヨコナデを行い、端反になるもの(4・8・12・14・16)がある。49は上師質擂鉢で、幅2.0cm、5本の荒いオロシメがある。

珠洲 (37~47) 器種には壺(37~40)、壺(41~43・45) 擂鉢(44・46・47)がある。壺は口縁端部が玉縁状になるものと細長い口縁部がくびれ、端部が角ばるものがある。外面のタタキメは荒いものが多いが、僅かに細かいものもある。壺はT種(45)、R種(41・43)がある〔吉岡1980〕。擂鉢は口縁端部にクシ描き波状文を持つ。

越前 (48) 48は擂鉢の口縁部である。口縁端部が三角形で、内面に沈線に入る。オロシメは8本で幅2.7cmである。

瀬戸、美濃 (27~29・31・32・34) 器種には皿(27・28)、茶碗(29・34)、広口壺(32)、香炉(31)がある。27は灰釉皿、28は鉄釉皿で、共に口縁端部が外に開く。28は断面三角形の付高台で、見込みを露胎にする。29は天目茶碗の輪高台で、34は丸碗の輪高台で、共に高台には鉄化粧がかかる。32は耳付広口壺で、内外面に鉄粧がかかる。31は外面

に2本の沈線が巡り、内外面に灰釉のかかる香炉である。

越中瀬戸 (33・35) 33は回転糸切り痕を残す皿の底部で、口縁部には褐色の鉄釉がかかり、見込みを露胎にする。17世紀。35は茶褐色の鉄釉皿で、口縁部が直立し、基筒底になる。見込みと腰部以下を露胎にする。

青磁 (17~20) 17・18は蓄文帶蓮弁文碗の口縁部である。19は内面に細線掘りのある割花文碗の口縁部で、1号庄1期に属する。20は碗の底部で、見込み中央を露胎にし、10弁の印花を持つ。

白磁 (21~24) 21・22は端反りの皿である。23は高台を挿出し、口縁部を八角形にした皿である。見込みは同種の皿の重ね焼きの痕がある。24は小皿である。23・24の釉は乳白色である。

染付 (25・26・50・51) 25・26・51は明の染付である。25は碗で、青色が薄くなつていて文様が明確でない。26は皿で、見込みに磨擦磨がある。疊付は露胎で、砂を付着している。51は外面に鳥、内面に草花文がある皿。断面には漆接合痕を残す。50はコンニャク印判の伊万里碗で、18世紀に属する。

瓦質土器 (53・54) 53は火鉢で、肩部に宝相華文の刻印がある。54は内面にヘラ削り痕のある火鉢である。

土製品 (52・55~57) 52は土製の犬で、前足1本、後足2本と尾が欠損している。共伴遺物から16世紀に属する。56・57は朝倉氏逃跡で言われているバンドコで、55はバンドコの蓋で、切り込みがある。

金属製品 (58・59) 58は火縄銃の鉛弾で、直径約1cm、重さ5.2gである。59は鉄製品刃先である。

石製品 (66~70) 66~69は粉挽き臼の上臼・下臼である。スリ目は6分割されている。70は石塔の基礎部である。

SE1245出土 (60~65) 瀬戸・美濃には天目茶碗(60・61)、碗(62)、皿(63)がある。60は黒色の鉄釉で、大窯1期である。62・63は灰釉で、共に高台裏に輪トチ痕を残す。64は珠洲の瓊の口縁部で、浅くくびれた口縁端部が角張り、口縁内面に沈線が巡る。65は漆器の皿で、見込みに水鳥が描かれている。
(宮田)

2. C地点4区

4区は北側をSD1131に、東側をSD1002に、南側をSD1304とSD1003に区画されている。区画内は南北約20m東西53m以上の長方形区画で、中に建物と井戸があることから面積が約1060m²(約321坪)程度の屋敷地と見ることができる。3区との境界は幅3~5m、5区との境界は幅約3mの道路と考えられ、柱穴などの遺構が認められない。

遺構は黄褐色粘土質を地山として検出されるが、西側部分では疊層が現われている。標高は約52mである。

遺構 (第5図、図版1・24・28・29)

検出した遺構は、掘立柱建物2、井戸3、穴11、溝6、柱穴多数である。

建物 SB1303は3間(15.05m)×1間(5.5m)の規模で、長軸方向はN-85°-Eである。柱穴は直径約0.6~1m深さ約50~80cmで、柱は柱根痕跡から直径が25~30cm程度のものが考えられる。SB1305は3間(7.25m)×2間(6.25m)の規模で、方向はN-102°-Eである。柱穴は直径約30cm深さ10~20cmで、柱の直径は10~20cm程度のものが考えられる。柱穴の小さな総柱建物であることやSK1125・SK1126より古いので、13世紀代の建物と考えられる。

穴 SK1129はSB1303の東側に接する幅3~5m深さ0.7~1mの溝状のもので、北側は西方へ少し折れて建物を囲むようである。池のようなものを想定することができるが判然としない。SK1130は幅5.2m長さ約12m深さ30cmで、SK1129との間に幅約3mを隔てて並ぶもので、土間の建物の基底部であろうか。SK1129とSK1130との間に遺構は見られず、区画内を南北に通ずる道を想定することができる。

SK1138は1.2m×2.1mの長方形平面で深さ50~60cmのもの。壁面が垂直で底面も平坦である。SK1139は2.1m×2m深さ70~80cmで、壁面と底面の特徴がSK1138とよく似ている。いずれも地下式の貯蔵庫を思わせる。

SK1149(第5図)は径が10~20cmほどの河原石を径1mの円形に敷きつめたもの。東側と南側にSD1301があること、西側にSE1148があることから、井戸に伴う洗い場のような水を扱う場と考えられる。

SK1140とSK1141は西側部分が発掘区外にあるため、大きさなど正確に把めないが、SK1140は3m×4mの方



形で深さ約25cm、SK 1141は3.7m × 4mの方形で深さが約35cmのものにならうか。SB 1303の西側に接するもので建物に付随する竪穴とみられ、SK 1129と同様の性格が想定される。

SK 1125・SK 1126は3区の東側にあり、SB 1303の中心としたブロックとはやや離れている。SK 1125は2.1m × 3.1mの長円形で深さ約30cm、SK 1126は2.5m × 3mの方形で深さが12cmで浅いもの。覆土の切り合いからみてSK 1125がSK 1126より新しい。SK 1125の北西隅と南西隅に接する柱穴は深さが40~50cmのしっかりしたもので、未掘の西側に主屋となる建物が付くものとみられる。

井戸 SE 1148は上部の径が1.6~1.8cm下部の径が50~60cmのほぼ円形で、深さが約3mのもの。素掘りで壁面は出入りがある。SE 1302は上部の径が約2.2m下部の径が約1mの円形で深さが約3.4mのもの。素掘りで壁面は出入りがある。SB 1148はSB 1303の南側にSK 1149と並んでおり、SB 1303に伴うものとみられ、SE 1302もSB 1303の北側に位置する付属井戸と考えられる。

SE 1305は上部の径が約1.2m底部の径が約50cm深さが約1.3mで、SE 1148・SE 1302と比べ小形で浅い。SS 1306と重なることになるが、SS 1306より古い時期に属する可能性が高い。

溝 SD 1131は幅約70cm深さ15~20cmで4区の北側を画し西流する。SD 1003は幅約1.2m深さ約40cmで4区の南側を画し、東流する。SD 1304とSD 1003はいずれも4区の南側を画するが、間が切れておりしかも大きさや流方向が異なることから、4区が西と東の二つの小区に分かれることが予想され、その間に通路を想定している。

SD 1135とSD 1137は幅30~50cm深さ5~10cmのもの。SD 1135はSB 1303の東側の柱穴2つの中間を北から南へ向い、SD 1137はSB 1303の南東部で建物に添って東西に向き、一方はSD 1135に続き他方はSK 1129につながる。SB 1303に伴う溝とみられるが、建物の東側が特に除湿排水を必要とする区画であったためと考えられる。P122 P123からおよそ5升の炭化米が出土しており、この区画に米が貯蔵されていたことが推測される。

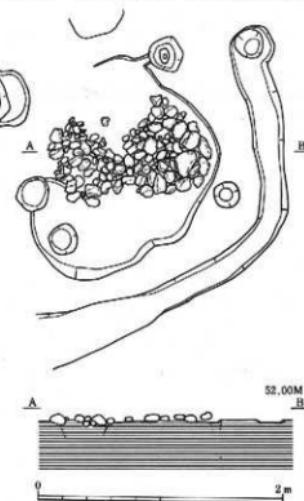
SD 1301は幅約20cm深さ約5cmでSK 1149に伴うものとみられることは前述のとおりである。

SD 1002は3区の東側を画する溝であるが、5区、6区へも続き発掘区を南北に貫流するもの。幅3.5~4m深さ70~80cmである。底面は平坦であるが、4区の一部と6区では溝の中央に幅0.4~1.5m深さ10~50cmの細い溝がある。4区と5区とでは溝の中心軸が約3mずれており、また接合部が幅1.2m深さ約35cmと狭くしかも浅くなっている。水が流れない。この狭い部分にSD 1003が接続している。このため水の流れは、4区は南から北へ5区では北から南へ導かれることになる。6区で南から北へ流れ5区からの流れと合わせてSD 1001を通して西方へ排水されるものと考えられる。このことからSD 1002は農業用水のようなものではなく区画のための意味が強いものと考えられる。

SD 1002の覆土(図版3)は3層に分かれ、遺物は全体に含まれるが、木製品は③層に集中していた。遺物は16世紀代第3四半期の良好な一括資料と考えられる。

3区 SD 1002の遺物(図版5~9)

土師質皿(71~90) 小皿は平坦な底部に短く立ち上の口縁部が付く71・75・90と平坦な底部に外反ぎみに開く口縁部が付く72~74・76~89があり、後者が圧倒的な量を占める。前者はSB 1305に伴うものとみられ混入であろう。点数は130点である。



第5図 SK 1149遺構図 (1/40)

白磁 (93・94・101・108) 93・94は口縁部が端反りで、高台置付を露胎とする皿。101は光沢のない灰色の釉を施す口縁部が内湾する皿。108は体部が内湾するやや深めの皿で、高台が幅広いもの。釉は青味を帯びた白濁色で体部上半と内面全部に施す。12点ある。

染付 (91・92) いずれも見込みに唐草文を施す碗。他に四方博文のある碗、唐草文のある口縁部が端反りの皿や口縁部が内湾する皿がある。8点ある。

瀬戸・美濃 (95~100・102~112) 95・96・105・109は灰釉を施したもので、他は鉄釉のもの。95・96は端反りの皿。105は碗。109は蓋の底部と思われる。灰釉のものは他に瓶や持腰形香炉と思われるものがある。

97~100・107は皿、102・103・106は茶碗。104は小形の壺である。皿は体部が内湾する97・98、体部の立ち上がりが底部から口縁部にかけて直線的に聞く99・100がある。97~99は見込みと高台内を残して全体を施釉するが、100は体部下半も無釉である。100は見込みに重ね焼きの痕がある。高台の径と同じ細い環状のもので、製品を直接重ねて焼いたらしい。98はち密な胎土の特徴から、100は瀬戸・美濃に類例がみられないこと等から越中瀬戸と考えられる。110~112はすり鉢でそれぞれ口縁部の形態が異なる。110は口縁部が屈曲するもの。111は口縁部が平坦なもの。112は口縁部が肥厚するもの。鉄釉のものは他に、見込みにかたばみ文を印した皿、茶壺、耳付きの大形壺・瓶、茶入・鉢がある。鉄釉のもの21点、灰釉のもの7点、越中瀬戸5点である。

珠洲 (113~115・117・236) 113~115はすり鉢でいずれも口縁部が平坦なもので、115は平坦面に櫛目を施す。117は小型の壺で肩部に櫛目を施す。236(図版11)は胴上部にヘラ描きのある甕。他に壺、鉢(542)がある。15点出土。

越前 (116) 薄手のすり鉢である。他に甕・壺の胴部片がある。8点出土。

土製品 (247) 247は瓦質の香炉で、唐草文風のスタンプ文が施されている。

金属製品 (118) キセルの吸口と元豊通宝(543)の2点がある。キセルは中に竹管の一部が残っている。

木製品 (120~170) 126~133は漆塗りの椀と皿である。126~132は黒漆地に赤漆で文様を描くもの。漆膜が薄いのではげて木胎の露出しているものが多く、何を描いたものか不明のものが多い。127・131・132は葉、130は扇が描かれている。127は内面全体を赤く塗っている。126・131・132は高台が低い椀、128は高い椀。129・130は体部の浅い椀である。133は黒漆の上にさらに赤(朱)漆を塗り重ねたもので、漆膜が厚い。高台内は黒いままで中央に文字が描かれているが、朱塗で描かれていたものが消され、そのあとから赤(丹)漆で文字が書きなおされている。133はいわゆる根来塗りとみられる。130は高台裏に「の刻みがある。

134~139は折敷の底板と考えられるもの。134は四隅が切れた隅切り折敷、139は側面に赤漆が塗られており、折敷の側板であろう。140・141は箱の側板。木口に他の板と組み合わせるための切り込みと木釘穴がある。いずれも透き漆をかけたものか、表面が薄茶色をしている。140は内面に黒漆が塗られ側面に接着のための漆が付着している。144~147は両端を細く削り出した箸である。148は衝重である。平面が六角形の特異なもので、仏前で用いるものであろう。149は蓋である。円形の板の中軸に細長い板を重ね、中心につまみをとり付けたもの。つまみは裏側に長く突き出す。142・143・150~154は曲物の底板。155・156は桶の底板と考えられる。150は中央に穴があり蓋かもしれない。157~160は桶の側板。161は柾目板を用いたもので、桶の側板と思われない。木口が擦れています。162はヘラであろう。身部の一側辺が薄く尖っている。163は鉢の柄。165は包丁の柄。167は鋤の刃部と考えられる。裏面に設けられた溝に別本の柄をあてがい、頭部下のえぐりと刃部中央の穴で柄を固定するのであろう。

168はくさびであろう。169は棒の一端に穴があり、他の一端に細で縛ったような擦痕がある。170は棒の両端に穴があるので、糸巻の部材と思われる。

120は槍の柄である。黒漆に朱漆を塗り重ねた漆膜の厚いもの。漆膜の特徴は根来塗りである。121は柾。122は柾。123~125は下駄。下駄はいずれも一本づくりで、四隅が丸いもの。123の歯は高く、124・125は低い。123・124の歯

は右側が減っており右足用、124は左側が減っていて左足用である。124の壺は方形である。

遺物 (図版10・11)

追物は縄文時代、13世紀代、16世紀代、江戸時代のものがある。13世紀代、16世紀代のものが建物など主たる遺構に伴うものである。量的には16世紀代のものが圧倒的である。

縄文時代 (233~235) 234は貝殻腹縁文を施した中期後葉串田新工式 [小島1974]。234は縄文地に弧状や直線の沈線を描くもの。晩期に属するかと思われるが、あるいは弥生時代に下るかもしれない。235は短舟形打製石斧。

土師質皿 (171~194) 小皿は形態の違いから4種が識別される。1は、平坦な底部に短く立ち上る口縁部が付く171~173・189・190。2はやや平坦な底部に外反ぎみに聞く口縁部が付く174・177~178・194。このタイプは口縁部内側に段をもつものが多い。3は底部が丸く口縁部との境がスムーズにつながる175。4は底部に回転糸切り痕をもつ176。である。194は底部外面に「長」の墨書きがある。1のタイプはX43~45 Y 133~139区とP111からの出土で、13世紀代と考えられるSB1305に伴うものであろう。他は16世紀代のものと考えられる。

青磁 (195~198・436) 195は線描の簡略化された蓮弁文をもつ碗、196は太い線の粗い蓮弁文をもつ碗、197・198は見込みに花文を印した碗である。436 (図版18) は見込みが露胎の碗である。

白磁 (199・200) 199は釉がやや黄味を帯びた皿。200は高台登付部分を露胎とする皿で、口縁部は端反りか。

染付 (202・203) いずれも口縁部が端反りの皿。203の外面には唐草文が描かれている。

瀬戸・美濃 (204~231) 204・206・216・222・223・230は灰釉を施したもの、他は鉄釉のものである。

203は筒形香炉。216は碗。223は見込みにかたばみ文を印す皿。206はおろし皿。222は口が大きく開く皿。230は口折れにならない深皿である。229は筒形の香炉と想われる。

205は薄い鉄釉のすり鉢。207~211・213~215は碗で、口縁部がくびれ高台が削り出しのもの。209は体部下半部から高台にかけて薄い鉄釉 (鬼板) がみられる。211は口径約8cmの小型のもの。210は高台裏に黒漆で「一」を描く。215は碗、201は底部に回転糸切り痕を残す皿。212・217は口縁部が外傾する皿。224~225は口縁部が内湾する皿である。225と226の見込みには菊花文が印されている。218は瓶、219は茶入。228は壺の底部とみられる。231は筒形の鉢である。249~252はすり鉢である。各々口縁部の形態が異なる。

以上のうち、215・220~222・237・229は胎土・釉薬の特徴から江戸時代の越中瀬戸とみられる。

伊万里 (232) 232は茶碗である。17~18世紀のものであろう。SD1131からの出土であるが後の混入であろう。

珠洲 (236~246・253) 236~243は甕、244・245は壺、246・253はすり鉢である。甕は口縁部が細長く外反する240と短かく丸まるものがある。前者は13世紀代に、後者はそれ以降のものである。236と240の胴上部にヘラ描きがある。すり鉢は平坦な口唇部に櫛目を施す253と、口唇部がまるくなり櫛目が口縁部内側に施される246があり、246は16世紀代に位置づけられている。

越前 (248・542) 口縁部が幅狭まで肥厚した甕である。542 (図版31) はSK1129・SK1130出土。

金属製品 (254~261) 254は黒漆をかけた小札。544は黒漆地に朱漆による描菱のあるもので、鏡の草摺の部分とみられる。255は資金具、256は毛抜き、257は包丁であろう。258~259は釘であるが、断面が方形の258・259と板状の260がある。261は直径約3cmで中空の部分と、直径約2cmの棒状の部分ととなるもの。用途は不明だが、中空部分に木質が残っていて棒がさし込まれていたらしく、例えば槍の石突きのようなものであろうか。

石製品 (262~269) 262・236は甕、264~266は砾石、267・268は石臼、269は石鉢である。

木製品 (270~273) 270は根元の直径が約30cmの柱根でP314に据えられた柱で、SB1303を構成する柱の一本であるかもしれない。271は大型で長円形の曲物の底板である。二枚以上の板をつなぐもので側面に接合のための木釘穴があり、側板との接合のための桜皮が残っている。272は桶の底板。273は柄杓の底板である。

(久々)

3. C 地点5区

5区は、溝 SD 1003・SD 1002・SD 1001によって区画される。南北約28m、東西27m以上で756m² (229坪) 以上の敷地を持つ。しかし、東側には遺構が少なく屋敷地は西側であったと考えられる。なお標高は約52mである。

遺構 (図版1, 25)

遺構には掘立柱建物・溝・井戸・穴・柵列等がある。溝は、郭内を区画する比較的大形 (幅3~3.5m) の SD1002と排水用の溝と考えられる SD 1100・1101・1106・1111・1112・1113・1119・1124がある。SD 1100と SD 1101は一封で道の側溝と考えられる。この道は4区に続くが SD 1101から見て西側へ折れ曲がるものと考えられる。

土塁のうち溝に連なる SK 1102・1114・1118は水溜めなどの施設と考えられる。SK 1116は四角に柱穴を持つもので径約2.5m、深さ約80cmである。「流し」などの施設と結びつくと考えられる。

井戸は3箇所検出した。SE 1103は径1.6m、深さ1.7mで SD 1101より古いと考えられる。SE 1115は径約2m、深さ1.9mである。穴 SK 1127と同時期と思われる。SE 1108は径1.2m、深さ1.3mであった。

掘立柱建物は6棟検出できたが、SB 1130を除いてすべて SD 1101で区画された地域に集中している。SB 1130は1間×1間、4m×3.5mで東西棟である。孤立する建物で小屋であると考えられる。SB 1104は1間×1間、4.6m×3.7mで東西棟である。SB 1132は3間×2間、(2.1+2.1+2.1m)×(1.8×1.8m)で東西棟である。SB 1133は1間×1間、3.9m×3.3mで東西棟である。SK 1116・1110を併いた水屋の建物を想定できる。SB 1134は1間×1間、5.2m×4.2mで東西棟だが、若干南側に傾く。SB 1135は3間×2間、(2.4+2.4+2.4m)×(2.7+1.5+…m)で南北棟と考えられる。SB 1135・1136は建て替えが行われている。また SB 1104・1132・1133と SB 1135・1136は SD 1114で区画されており、それぞれ柵 SA 1138・SA 1139が伴っていると考えられる。

遺物 (図版13)

遺物には、土師質土器、瀬戸・美濃、越中瀬戸、珠洲、青磁、白磁、土製品、石製品、金属製品、木製品がある。

土師質土器 (274~290) 274・275・277・281は底部が丸く口縁部がスムーズに立ち上がる。280は底部中央が持ち上がり口縁が肥厚する。286・287・290は底部が平坦で口縁内部が傾斜する。282~285・288・289は底部が平坦で口縁が外反してから端部が内側に入る。276・279はやや深か手の杯様のものである。

瀬戸・美濃 (291~298・305・314・315・539) 291は灰釉皿で SK 1102から出土した。539は灰釉花瓶である。292は歪で内面に鉄釉が施されている。294は鉢し皿である。295~298は鉄釉の皿である。305は鉢で茶灰色釉が施されている。314・315は鉢で茶灰色釉が施されている。

越中瀬戸 (300・304) 300は鉄釉皿で内面かえりがあり蓋が付くと考えられる。304は、茶灰色釉の皿で見込みに菊花文が刻されている。

珠洲 (311・312・313) いずれも鉢である。311は平坦な口唇部に櫛目が施されている。312は口唇部が窪み口縁が肥厚する。313は口唇部が丸味を帯び、櫛目が施されている。いずれも16世紀代のものと考えられる。

青磁 (306・307) 306は暗青灰色の皿で口縁が波状で外反する。307は青灰色の碗で内外面に蓮弁文を持つ。

白磁 (302・303) いずれも皿である。302は乳白色釉で貫入がある。303は灰白色釉である。

染付 (308・309・図版10, 201) いずれも皿である。309は内面に玉取獅子、外面に唐草を描いている。201は、口縁部が内湾する基筒底で、外面に波涛文帶を描き内面にも文様が施されている。

土製品 (318) 石製品 (316・317・319) 318は火鉢、316・317はひき臼、319は砥石である。

金属製品 (320・図版20, 506) 木製品 (図版9-166) 320は鉄鎌、502は包丁であると考えられる。166は506の柄で溝 SD 1006から両者とも出土している。遺物は全体として16世紀代に比定されるが、SD 1112・1113により区画される部分では14世紀代の遺物も共存しており、2時期に大きく分かれていると考えられる。



石製品（図版6、119） 119は燈籠である。蓮弁が複弁であることなどから基礎部にあたると思われる。（高慶）

4. C地点6区

C地点6区は北側・西側をSD1001で、南側を西から入り込んでいる谷や溝で、西側をC地点7区の段丘の崖で区画されている。東西約100m、南北約35mである。本地区は古絵図の言う本城より1m低く、標高54mである。

遺構（第6・図版1・26・29）

遺構には掘立柱建物、溝、井戸、穴、石組み遺構がある。16世紀に属するものが多い。

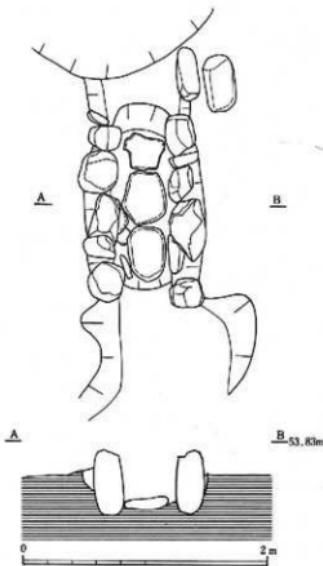
建物 復原できた建物はSD1002に直交あるいは平行関係になる位置に配置されている。SB1006は桁行2間（4.6m+3.6m）、梁行2間（2.8m+2.8m）の縦柱建物である。南側に3.5m×3.6mの張出し部分がある。棟方向は東西で、N-90°-Wである。張出し部分は南北方向に棟を取ると考えられる。柱穴は長軸110~130cm、短軸60~70cmの長円形で、柱根痕は直径25~30cmである。弓庄Ⅳ期の最後の建物である。SB1007は、配置からSB1006と同一時期の建物と考えられる。SB1007は桁行2間（3.6m+3.6m）、梁行2間（2.1m+2.4m）の縦柱建物である。棟方向は東西で、N-89°-Wである。柱穴は30~40cmの円形で、深さ50~60cmである。柱根痕は15~20cmである。この2つの建物の東側にあるSK1012とSK1019は100~130cmの円形で、深さ90~110cmである。穴の形状や建物に復原できる穴がないことから、門のような通用施設と考えられる。SB1208は桁行2間（3.5m+3.9m）、梁行2間（1.8m+2.1m）の側柱建物である。棟方向は東西で、N-85°-Eである。

溝 溝には郭に区画する大溝（SD1001・1002・1046）、その溝に間連する中溝（SD1022）、建物の雨水流しや耕作用の用水路などの小溝がある。その小溝は多数あり、曲りくねっている。（宮田）

SD1001は6区の北側と東側を画する大溝である。幅5~8m深さ1.5~2mで、北側中央部では鍵手状に屈曲している。屈曲部の西端は長さ約5mにわたって幅約3mと狭い所があり、北東部は深さが約1.2mと浅くなっている。

大溝の底面は平坦で南辺の壁面の立ち上り角度は約40度である。溝底には径0.5~1mの河原石がみられ、石垣の一部が落ち込んだものとみられる。大溝の南と西に面して土塁が築かれていたようである。大溝やSD1022やSD1046には土塁の崩壊土とみられる黄色土の流入が認められる。SD1022とSD1046が土塁をはさんで並走するものと考えられることや6区東側にみられる探土穴が土塁下部とみられる所に特に集中する状況からみて、土塁の基底部の幅は約4mであったらしい。SD1001中央部の幅狭的部分と北東部の浅くなっている所は、非常時の通路として意図的に掘り残されたものと考えられる。

SD1001とSD1002は一部重複しているが、5区の柱穴や溝がSD1001に切られている状況や幅の狭い所があることから、SD1001が6区の防備を強化するために先にあったSD1002を拡幅してつくられたことが推定される。そのようにみると、SD1001とSD1022の間は当初幅約4mの道路であった可能性がある。またSD1046はSD1002へつながっていたものとみられる。SD1001の拡幅に伴い4区5区のSD1002がそのままであったか埋められたかははっきりしないが、SD1001のように長期間開いたままではなく、比較的早い時期に埋まったことが、覆土の状況や遺物のあり方からうかがわれる。SD1001は出土遺物からみて、廃城後



第6図 SX1004遺構図 (1/40)

もすぐには埋まらず、現代に至るまで水田や農業用水として使われる中で、次第に埋まったことが知られる。

SD 1001の覆土は地点により若干異なるが、Aセクション（図版3）を例にとると26層に分かれ、最上層が現在の水田の基盤となる各土で、①～⑩層が伊万里を含む層で、18世紀を中心とする時期、⑪～⑯層が漆器などの木製品を多く含む層で16世紀第3四半期のものとみられる。⑰～⑲層は土星の崩壊土と考えられる。（久々）

SD 1022は幅1.8～2.5m、深さ60cmである。溝底は10cm程深く、2段になっている。流れは西流である。溝の西側はSK 1025は埋めて土留め用に石列を作る。SD 1007・1008はSK 1012・1019より以前の溝である。SD 1007は幅20～70cm、深さ10～20cmである。流れは北流である。SK 1021・1024で切られ、覆土の遺物（464）から15世紀のもの。

井戸 井戸は1基検出した。SE 1032は110cm×120cmの円形で、深さ140cmの素掘り井戸である。覆土は黒色で、20～30cm大の石を含む。弓庄Ⅳ期の井戸は深くて大きい点から考えると、それ以前の井戸と考えられる。

穴 穴には3～3.5m×1～1.5m、深さ20～50cmの不整円形がある。柱穴状ピットは多数あるが建物に復元できない。

石組み造構（SX 1004） 直径30、長さ60cmの長細い河原石を半分程埋めて長方形に組み、底には30cm×45cmの偏平な河原石を3個敷く。規模は1m×1.7mである。それらの石は火を受け赤化している。底には炭・焼土がある。覆土中から土師質皿が若干出土している。

その他、本調査区の南西側はやや窪みになっていて、3本の溝（SD 1018・1038・1039）が走っている。この溝はSD 1203・1204に統くと推測される。覆土中に17世紀以降の遺物を若干含んでいる。

以上、造構は切り合い関係と出土遺物から3時期に分かれる。1期（15～16世紀前葉）SD 1007・1008・SK 1025
2期（16世紀前葉～中葉）SD 1002・1022・1046、3期（16世紀後葉）SD 1001、SB 1006・1007となる。

遺物（第14～20図・図版30～44）

遺物には、土師質土器、珠洲、越前、瀬戸・美濃、越中瀬戸、青磁、白磁、染付、瓦質土器、土製品、金屬製品、石製品、木製品がある。大部分は16世紀のものである。

SD 1001出土の遺物（321～394・425・446）

土師質皿（321～327） 器形は底部がやや平坦で、ヨコナデのため口縁端部が外反して、少し立つ。口径は9.8～11.2cmのもの（321～327）、13.8cmのもの（327）に分かれる。

珠洲（340～344） 器種には甕（340・341）、擂鉢（342～344）がある。甕は短い口縁部をくの字に折り、肩からタキガが始まる。擂鉢には内側の口縁端部にクシ描き波状文を持つもの（342）、もたないもの（343・344）がある。

越前（337・338） 337・338は擂鉢で、内削りの口縁端部の下に沈線が1本巡り、オロシメで内面を埋める。337はオロシメ9本で幅2.8cmである。内底面のオロシメは摩耗している。断面に漆付有。338はオロシメ11本で幅3.0cm。

瀬戸・美濃（330・345・446） 330は鉄釉皿。335は内外面に鉄化粧がけした擂鉢。446は灰釉皿で見込みに印花文。

越中瀬戸（331～336・339・347・348） 331～333は灰釉皿である。331は削出し高台である、332は断面三角形の削出し高台で、口縁端部が外に開く。331～333は腰部から高台裏まで露胎で、332は見込みも露胎である。334は削出しの輪高台の天目茶碗の底部で、腰部から高台裏まで露胎である。335は緑色の灰釉碗の底部である。336は回転糸切り底である。339は口縁部を折り返して付けた擂鉢で、オロシメが荒く下から上へ搔揚がる。348は内外面に鉄粧がかかる広口盞である。334は16世紀後半～17世紀前半、339は19世紀以降で、その他は17世紀以降であろう。

青磁（328・329） 328は雀文帯蓮弁文碗、329は細蓮弁文碗で見込みに文様があり、高台裏を露胎にする。

伊万里（349～353） 器種には碗（349・350）、皿（351～353）がある。350はコンニャク印判で、18世紀のもの。

石製品（357・358） 357は粉挽き臼の上臼である。358は五輪塔の火輪部分で、差込み穴がある。共に花崗岩質。

その他、354は弥生時代の盞の底部である。355は須恵器の盞の底部である。356は一部欠損しているが、小穴が4個空かれている鉄製品である。346は素焼きの鍤で、重さ24.3gである。（宮田）

木製品（359～394） 359～373は漆塗りの椀である。すべて黒漆地に赤漆で文様を描くもの。漆膜がはげて木胎の露出したものが多いため。359・360・362～364・366は高台の高い椀、368～373は高台の低い椀で、前者は体部が深いのに比べ後者は浅い。359・370は鶴、360は扇、364は月、368は花、369は扇と花、371は葉、372は水草と柳、373は水草とみられる文様が描かれている。高台内には赤漆による文字が描かれた359・363・369と刻みで三ヵ月を刻む364や「一」を刻む370・373がある。362は体部内面全体に赤漆を施している。

374は曲物の底板、375は隅切折数の隅の側板。376は衝重の台、377は足付折数の足、378は折数の底板であろう。379は桶の側板、380は桶の底板。381は栓であろうか。頭部のえぐりは紐が付けられたものであろうか。382は桶のタガ。383は曲物の底板。384は曲物の側板である。385は柄杓、386は折数の底板を曲物の底板に再加工しているものであろうか。397は桶の底板。386は長さ57cm身の長さ18cm幅約7cmのもので、大型の杓子とみられる。389は漆塗りの桶で、ほとんどはげているが赤漆が認められる。390は鋤の把手であろう。391は包丁の柄、392・393はくさびであろう。SD1001は江戸時代の遺物を含んでいるが、382の桶のタガ、389の漆塗りの桶がこの時代で、他は16世紀代に属するものと考えてよい。

(久々)

SD1002出土の遺物（488～499・501）

土師質皿（488～495） 器形は底部がやや平坦で、ヨコナデのため口縁端部が外に開いて、少し立つ。口径は8.7～10.2cmのもの（488～491）、11.2～13.5cmのもの（492～495）に分かれる。

珠洲（498・499） 擃鉢には、内削りの口縁端部にクシ描き波状文のあるもの（499）、ないもの（498）がある。

瀬戸・美濃（501） 501は口縁端部を内削りにした撃鉢で、内面と外面の腰部まで鉄化粧がかかる。

越中瀬戸（497・502） 497は鉄釉茶入れの底部である。502は陶鍾で、全体に鉄釉がかかる。重さ19.2g

白磁（496） 496は端反りの皿で、疊付を露胎にする。

その他の出土の遺物（395～435・437・440～475・477～487・503～505・507～514・540）

土師質器（395～430・470） 皿（395～430）の器形には丸皿のもの（420・422）、底部がやや平坦で、ヨコナデのために口縁端部が外に開いて、少し立つもの（395～401・404・407～419・423・424・426・428～430）、底部にヘラナデを行うものの（402・406・425）がある。403・421は回転糸切り底である。470は土師質鉢である。

珠洲（461・463・471～475・540） 器種には斐（473・474）、壺（461・471・540）、撃鉢（463・472・475）がある。斐は短い口縁部がくの字に折れ、肩からタキを施す。壺はT種（471）、R種（461・540）がある。撃鉢には内削りの口縁端部にクシ描き波状文のあるもの（472）、ないもの（463、475）がある。

越前（462・464・465・479・480・500） 器種には壺（464・465・500）、撃鉢（462・479・480）がある。壺は口縁端部が丸くなる。464は漆接合痕がある。462はオロシメ10本、幅3.0cmの撃鉢で、内底面が摩耗している。

瀬戸・美濃（443～445・447～451・454・466～468・478・481・483） 器種には皿（445・447・448）、天目茶碗（443・444）、水滴（449）、茶入れ（450）、瓶（451）、撃鉢（466～468・481・483）がある。皿は灰釉皿（445・448）と鉄釉皿（447）がある。447は見込みを露胎にする。天目茶碗は口縁端部がくの字に折れて立ち上がる。443は腰部に鉄化粧がけしている。454は鉄釉の茄子茶入か。撃鉢は口縁端部を内削りにし、内外面に鉄化粧がかかる。オロシメは底部から上へ搔掻げる。468は糸切り底である。478は撃鉢の片口部分で、胎七・釉調から瀬戸・美濃のものであろう。

越中瀬戸（452・453・457～460） 器種には茶碗（452・453）、壺（458）、さや（457）、陶鍾（459・460）がある。453は削出し輪高台で、腰部以下、露胎である。460は重さ21.6gである。時代は17世紀以降のものが大部分である。

青磁（431～435） 431・432は口縁端部が折れる碗である。433は蓮弁文碗で釉が厚い。435は細蓮弁文碗。

白磁（437） 437は削出しの輪高台で、腰部以下露胎である。弓庄Ⅰ期。その他、端反りの皿がある。

染付（440～442） 明の染付である。441は草花文のある端反り碗である。442は葵筋底で、見込みに花文様がある。

伊万里 (482・484・485) 482は紅皿で、型起こしで作られている。485は草花文碗である。

瓦質土器 (469・505) 469は擂鉢の口縁部で、オロシメが摩耗している。505は風炉で、窓が付く。

土製品 (503・504) 503は火鉢で、胸部に雷文を印刻する。504はバンドコの蓋である。

金属製品 (507~511) 507は火繩銃の鉛弾で、直径1.1cm、重さ7.6g。508は小柄の一部。509は4mm×5mmの長方形の穴が6つある鉄製品で、漆が塗られており、甲冑の一部と考えられる。511は鉄釘である。

石製品 (512~514) 粉挽き臼の上臼で、513はスリ目を6分割している。石質は花崗岩質である。

木製品 (394) 角棒に墨書きした木札。長さ20.3cm、幅1.3cm、「□藤(か) □ マサ □」と判読できる。人名を記したものか。下端は墨書き後に尖らされている。江戸時代以降の溝の覆土中で、耕作土の下より出土している。

その他、486は弥生時代の甕の口縁部である。487は須恵器の杯身である。

(宮田)

5. C 地点7区

7区は、第2の郭の北西隅で、城跡のある段丘上の西端に位置する。標高は52m前後で段丘直下との比高差は約7mを測り、新川平野を望むことができる。

遺構 (図版1・27)

遺構には溝、穴、柱穴がある。遺構は発掘区の南側に集中する傾向があり、北側では集中がみられなかった。

溝 SD 1211は幅2~2.5mで、検出できた長さは約7mであった。溝の北側には径50cm前後の石が整然と並べられ、石垣となっている。この石垣は北西隅にある掘り込みを埋めた時点で築かれたものと見られ、土塁 SK 1221・1222の後に溝が構築されたことをうかがわせる。この溝は6区のSD 1022の延長と考えられ、7区に構造物を築く際、整地が行われ溝を削り取った可能性が強い。なお溝は西流し、段丘直下に流されていたものと考えられる。

穴は12箇所ありそのほとんどが発掘区南側に集中する。不定形でその性格についても不明である。

遺物 (図版21)

遺物には土師質皿、瀬戸・美濃、越中瀬戸、青磁、白磁、染付、須恵器、土製品、金属製品、石製品がある。

土師質皿 (515~522) 515は底部中央が立ち上がり口縁部がやや外反する。516は底部が平坦で口縁部が外反する。517は底部が平坦で口縁部への立ち上がりが小さく浅手である。518・519は底部が平坦で口縁部が外反してから端部が内側に入る。519・520・522は底部が平坦で口縁端部が内側に入る。

瀬戸・美濃 (527) 527は透明な緑色釉が施されており内面に菊の花卉を模した刻線が施されている。

越中瀬戸 (528・529) いずれも鉄釉が施されている。529は茶入れ、529はおもりである。

青磁 (523・図版7、438) 523は青灰色の釉が施された碗である。外面にヘラによる文様が施されている。438は暗青灰色の釉が施された皿で、内面に印花文がある。

白磁 (524・525) 524は白灰色の釉が施された皿で外面に貫入がある。525は乳白色の釉が施された皿である。高台は幅広で、挟り込まれる部分がある。

染付 (526・439) 526はL字縁端部、脚部に暗青色釉で線が描かれている。439は草花文が施された碗である。

須恵器 (530) 530はSD 1211から出土したが、同一個体が5区 SE 1108からも出土している。器形は杯蓋である。上面が平坦で口縁端部が丸い。

土製品 (533) 533は上部が失なわれているが、バンドコであると考えられる。

金属製品 (531・532) 531は足の付く香炉であると考えられる。532は把手である。

石製品 (534~537) 534は砂岩質の砥石である。535~537はスリ臼であるが、535は上臼、536・537はいずれも下臼である。

(高慶)

IV 調査の成果

1. 出土遺物による時期区分

弓庄城跡の1次～5次の発掘調査で検出された遺構は層位的に確認できず、出土遺物も層位的に検出されなかった。16世紀に城構えのための整地が行われているため、遺構内から古いものと新しいものが混在して出土することが多い。そのため、16世紀の遺構のある所では古い時期の遺構を単独で把握することはむずかしい。

このような遺物・遺構の検出状況から、一括遺物として扱われる例が少なく、遺物の時期を区分することは困難を極める。そこで、最近の中世陶磁器の研究成果や県内出土中世土器編年図〔宮田1984a〕を踏まえて、遺物との関連から、弓庄城跡の中・近世土器を4期に分け、弓庄Ⅰ～Ⅳ期とした。^{注1}なおⅠ期以前の土器はここでは触れないでおく。

弓庄Ⅰ期（第7図1～16）

弓庄Ⅰ期は12世紀後半から13世紀中葉である。遺構・遺物の出土量は弓庄Ⅳ期に次いで多く、当地の中世集落の一端を示すものと考えられる。遺物もA地点3区、C地点1区、F地点に多く見られる。日常土器には土師質皿、珠洲中国製磁器がある。土師質皿、珠洲が主体であり、この傾向は弓庄Ⅲ期までづく。

土師質皿には回転糸切り技法（A類）と型押し・手づくり技法（B類）がある。A類はバラエティーがあり、6つに分類できる〔宮田1984b〕。量的にはB類が多い。この傾向は同時期の神田遺跡〔橋本1982〕、入善町じょうべのま遺跡C地区〔山本1982〕でも同様である。A類のうち5・6のタイプは油煙がなく、灯明皿として利用されていない。B類は器高が低く、口縁部が短く屈曲する。外底面は型押し後、軽くナデを行う。内面は丁寧にナデを行う。

珠洲には壺・壺・鉢の器種がある。珠洲編年〔吉岡1981a〕のⅠ期に当たる。壺（1・2）の口縁部はくちばし状に折れたり、外面のタタキ目は細かい。鉢にはオロシメのないもの（3・4）とあるものがあり、片口が付くものがある。

中国製磁器には白磁、青磁がある。白磁には玉縁碗①、端折れ碗②がある。青磁には龍泉窯系の劃花文碗③、片形りとクシ状工具で花文を見込みに描く皿④、同安窯系クシ描き文碗⑤がある。太宰府分類〔横田他1978〕によれば、白磁は碗Ⅳ・V類、青磁は龍泉窯系碗I～4類、皿I～2類、同安窯系碗である。

弓庄Ⅱ期（第7図17～25）

弓庄Ⅱ期は13世紀後葉から14世紀である。遺物も散在的で、遺構も少ない。日常土器には土師質皿、珠洲、中国製磁器、常滑、瀬戸がある。この頃から量的には少ないが、瀬戸、常滑、越前が搬入される。

土師質皿はB類であり、A類はほとんどない。本年度出土したA類の糸切り底の皿は、胎土・焼土が弓庄Ⅰ期のものと違っていることから、弓庄Ⅱ・Ⅲ期に属すると考えられる。県内では婦中町蓮花寺遺跡では14世紀後半～15世紀の糸切り皿が1点出土している〔岸本1984〕。石川県ではA類は13世紀中葉までにはなくなる〔四柳1980・田嶋1981〕。13世紀～16世紀の岐阜県江馬氏館〔神岡町1979〕ではA類・B類が混在している。京都ではB類だけ〔松藤1978〕で鎌倉ではA類・B類とも見られる〔服部1984〕以上の例からA類・B類のあり方には地域差がある。県内でも、出土品が搬入品でなければ、A類（A-3・4類）は量的には少ないが、残存して行くと考えられる。珠洲はⅢ・Ⅳ期に当たる。壺（17）は短い口縁部が折れ、タタキ目が荒い。檜鉢（18）の口縁端部は外削りになり、外底面に板オコシ痕が残る。瀬戸には灰釉碗がある。立山町若宮B遺跡〔狩野1982〕では灰釉碗・花瓶が出土している。白磁には口禿皿（皿VI類）がある。青磁には龍泉窯系鍋蓮弁文碗（碗I-5類；23）、外面に蓮弁文のある皿（杯III-4類；22）、口縁端部を直上に引き出す盤（杯III-3類；24）がある。碗I-5類と杯III類とでは時間幅があり、前者から後者へと変化するが、弓庄城跡ではその差を遺構から検出できなかった。量的には白磁より青磁が多い。25は常滑の大甕である。県内で初めて常滑が確認された。この時期は、弓庄城跡では確認できなかった越前が県内では見られる。出土例は婦中町友坂遺跡〔松島1984〕、小矢部市日の宮遺跡〔上野他1978〕、八尾町祇樹寺裏出土の壺〔久々1984〕がある。前

2者は朝倉分類〔吉岡町1981〕によれば壺はⅠb群（14世紀中葉），Ⅱ群（14世紀中～後葉）にあたり，壺は14世紀である。また，最近，13世紀後半から14世紀の京ヶ峰古窯跡群（越前・常滑系）が4基確認された〔酒井1985〕。以上から，弓庄Ⅲ期は県内の中世陶磁器の組成上，弓庄Ⅳ期とともに1つの画期にあたる。

弓庄Ⅲ期（第8図26～44）

弓庄Ⅲ期は15世紀である。遺物・造構はC地点6区，E地点1区に見られる。日常土器には土師質皿，珠洲，越前瀬戸，中国製磁器がある。瀬戸が多くなる。

土師質皿（29・30）はB類である。大きく外反する口縁部がつき，外底面にヘラナデを行く皿（C地点6区495など）はこの時期に属すると考える。同期の日の宮遺跡では壓押しの底部に短い口縁部が直立するものと丸底のものがある。珠洲は壺・壺・擂鉢の器種がある。擂鉢（28）は内削りの口縁端部にクシ描き波状文がある。越前は壺・壺の器種がある。口縁外側に縫，内側に浅い凹線がある壺（31）は朝倉分類によればⅢc類にあたり，15世紀中葉である。肩には「本」の凹字のスタンプがある。壺（32）は口縁端部が丸くなる。瀬戸は平碗，鉢皿，三足盤，香炉，柄付片口，花瓶の器種がある。器種のバラエティーが多い。白磁には高台を抉出すものとそうでないものがある。前者には平縁のもの（38）と八角形のもの（39）がある。前者・後者とも見込みに前者の皿の重ね焼きの痕があるものがある。釉は乳白色である。青磁は白磁より量・器種が多い。端反り碗42・同様な器形で内面に印花文が凸状になる40，稜花皿43，雷文帶蓮弁文碗44などがある。40～42は沖縄県勝連城跡に見られるタイプ〔亀井1983〕で，14世紀後半から15世紀のものであろう。44は紀淡海底出土のAタイプ〔亀井1980〕で，15世紀前～中葉である。

弓庄Ⅳ期（第8～10図45～116）

弓庄Ⅳ期は16世紀で，C地点4区のSD1002の一括遺物（美濃大窯Ⅲ期まで）によって細分される。しかし，各期の陶磁の組合せが明確でないので，ここでは一括して扱う。溝で区画された郭，深い堀，大きな掘立柱建物，深い井戸など城としての機能を表わす。C地点2～7区，E地点1・3区の造構がそれにあたる。日常土器には土師質皿，珠洲，越前，瀬戸・美濃，中国製磁器，产地不明の国内産陶磁器がある。珠洲は減少し，瀬戸・美濃は急増し，土師質皿以外の他の製品を圧倒する。中国製磁器では明染付が多くなる。その他，瓦貢火鉢・風炉，土製バンドコがある。

土師質皿は端反りなるもの（52～54・57），へそ皿（55・56），ヨコナデが強いため端部が尖るもの（58～60）がある。

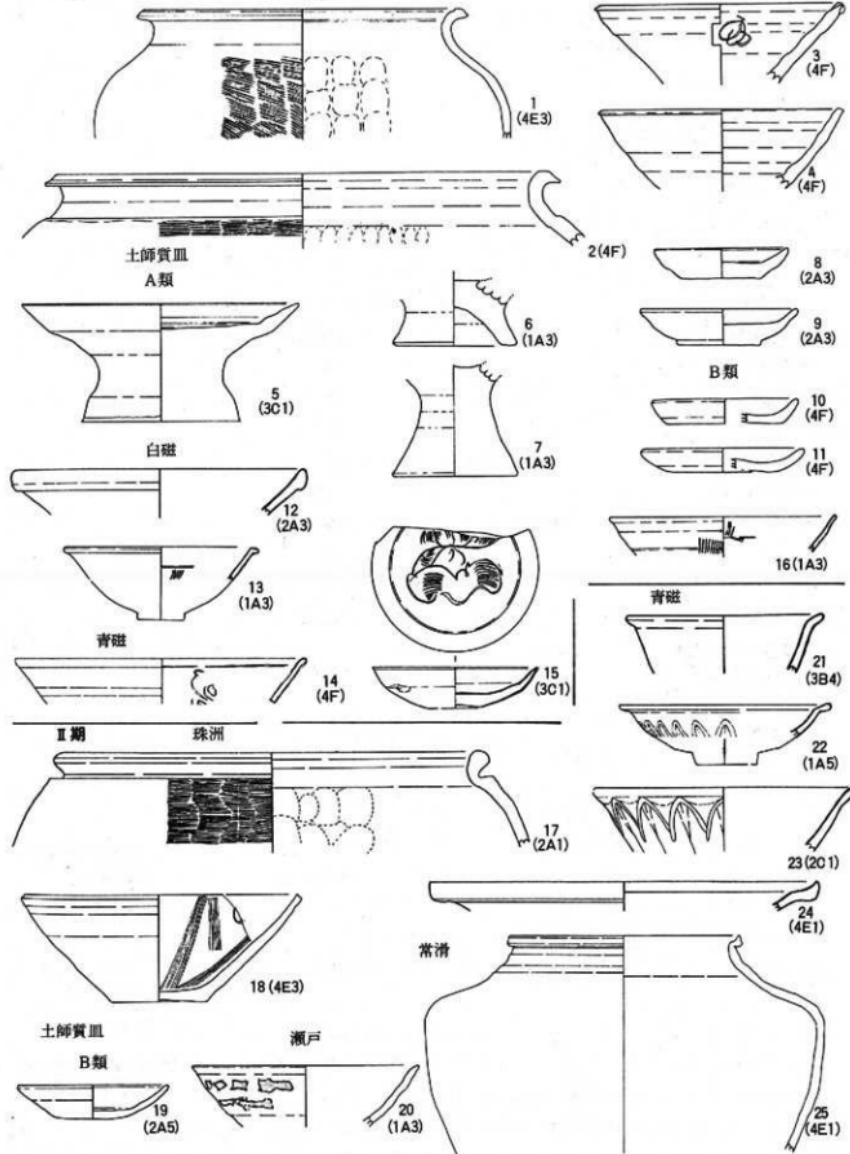
珠洲は「16世紀前半のある時点で珠洲窯が廃絶した」と吉岡1983ということから，弓庄城跡出土の壺・擂鉢・壺は存在期間を示す資料となる。擂鉢（47・48）は口縁端部の内削りが尖り，クシ描き波状文を施す。SD1002出土ではこのタイプとⅢ期の擂鉢があり，後者は存続期間を示すものと考える。

越前は壺・壺・擂鉢があり，量はわずかである。朝倉分類で共にⅣ群にあたる。

瀬戸・美濃は灰釉皿，鐵釉皿，天目茶碗，丸碗，茶入，香炉，広口壺，瓶，擂鉢の器種がある。92は大窯以前の製品で弓庄Ⅲ期に属するが，A地点7・8区のSE01一括出土の共伴遺物から，この時期まで伝世されたものであろう。16世紀前半の「瀬戸山離散」後の瀬戸では，美濃の大窯Ⅲ期以降に対応できる窯がないので，弓庄Ⅳ期後半のものは美濃製品であろう。しかし，瀬戸と美濃を識別できないので，ここでは一括して瀬戸・美濃と呼んでおく。美濃大窯Ⅳ期になると志野が出現し，その時期は天正11年（1583）～天正14年（1586）という〔井上1983〕。また，大窯Ⅳ期は灰志野，志野釉，黄瀬戸が現われる〔田口1983〕。弓庄城跡からは黄瀬戸，志野製品が出土していないので，大窯Ⅴ期以前，さらにⅣ期以前ということになる。主体は大窯Ⅱ・Ⅲ期にある。皿には端反りの灰釉61・62・64・65，外反する鐵釉67・68，内湾する灰釉63がある。その他，内面を丸ノミで彫る菊皿（66），ヒダ皿（69）がある。61・62・64・65は大窯Ⅰ・Ⅱ期，63・66・69は大窯Ⅱ・Ⅲ期にある。高台には付け高台と削出し高台があり，ロクロ成形で作られている。見込みの印花文には菊・カタバミがある。見込みを内剥げにする皿もある。天目茶碗は口径7cmと13.5cmのものがある。輪高台と内反り高台である。73・74は大窯Ⅰ期，75～77は大窯Ⅱ～Ⅲ期，78・79は口縁部のく

I期

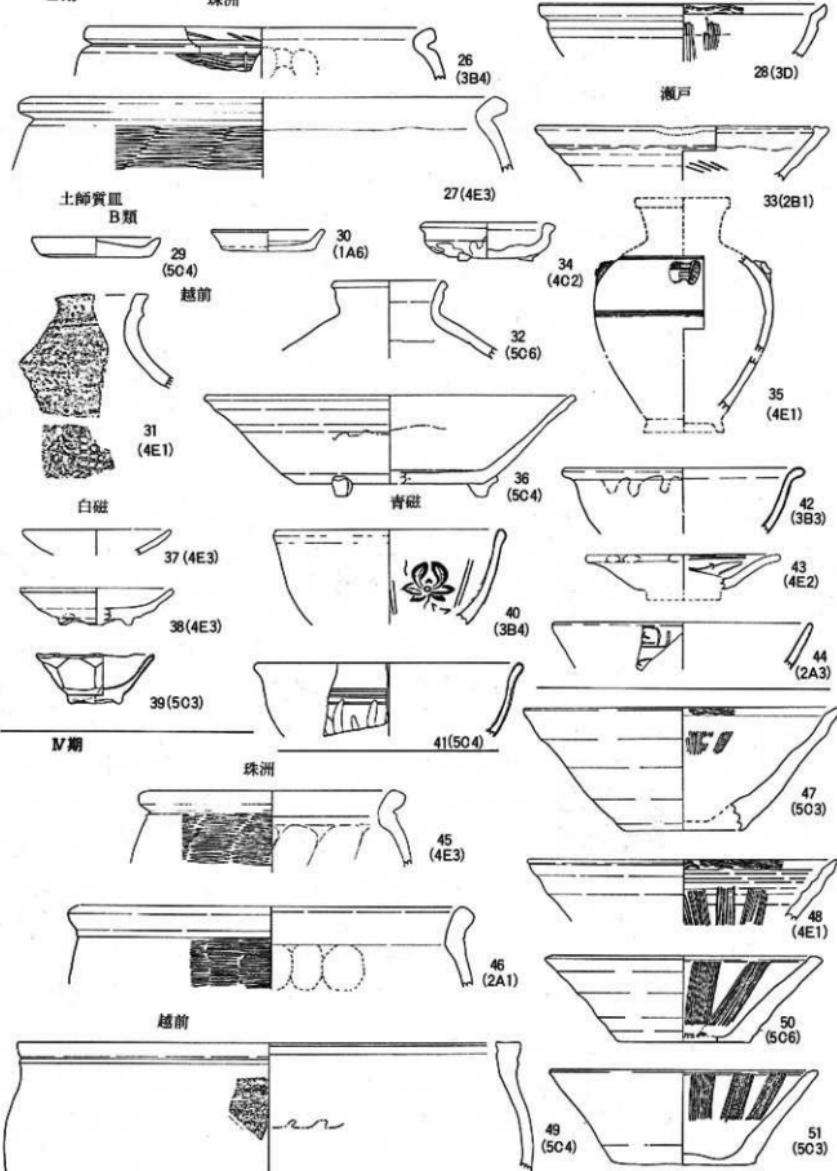
珠洲



第7図 弓庄I期・II期の土器 (1~4・17・18 1/6・25、1/8、その他1/3)
(5C3)とは弓庄城5次調査のC地点3区のことである

Ⅲ期

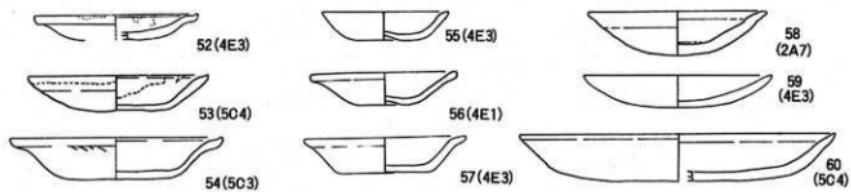
珠洲



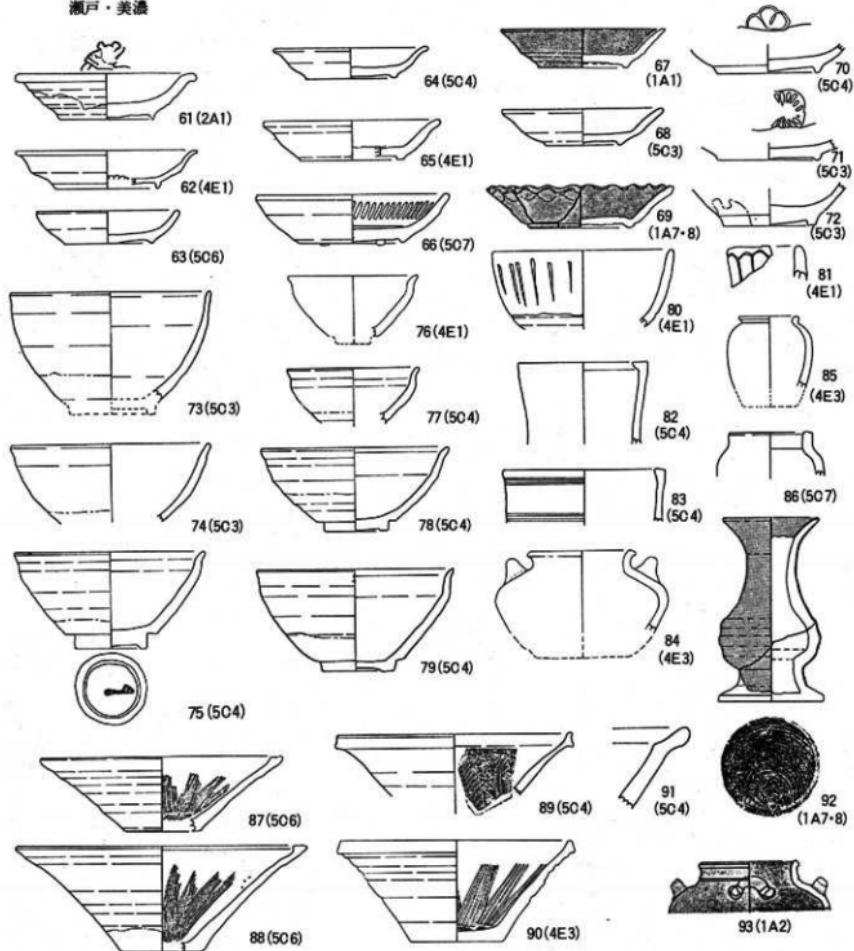
第8図 弓庄Ⅲ期・IV期の土器 (29・30・34・37~44、1/3、その他1/6)

IV期

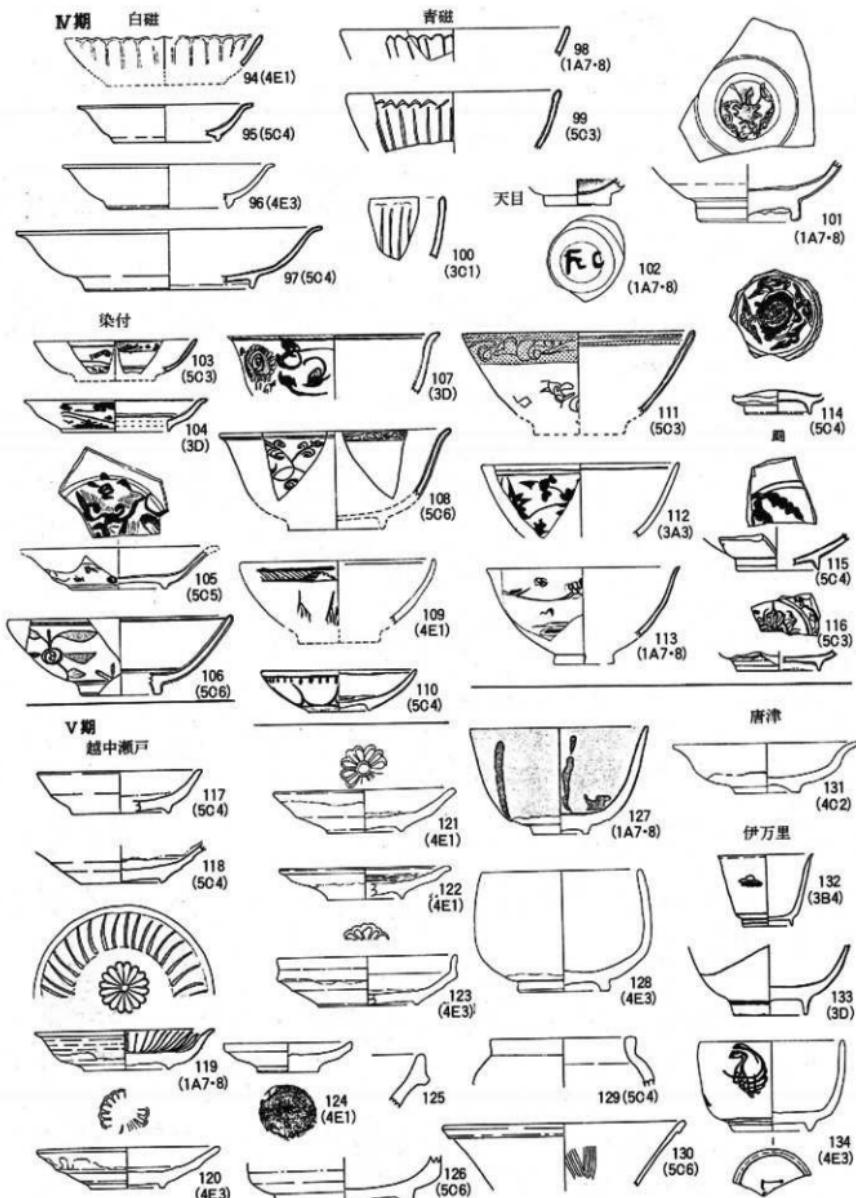
土師質皿



瀬戸・美濃



第9図 弓庄IV期の土器 (87~90、1/6、その他1/3)



第10図 弓庄 IV期・V期の土器 (131、1/6、その他1/3)

びれが下になっており、やや後出的な様相である。擂鉢はオロシメが見込みから上へ搔掲げ、内外面に鉄化粧がかかる。ロクロ成形で糸切り底である。口縁部の形状によって3つに分かれる。口縁端部が内削りで、内面に稜ができる（A類：87・88）、口縁部が曲がり、内面に棱ができる（B類：91）、口縁部の外側に稜ができる、断面三角形になるもの（C類：89・90）がある。B類は少量であり、大窯Ⅱ期の妙土窯出土品にも若干含まれている〔檍崎1976〕。A類は大窯Ⅰ期、C類は大窯Ⅱ期以降である。A類は本年度の調査区では量的に多い。C類はE地点3区に多く見られる。この両地区に時期差を考えられるかどうかは今後の擂鉢の数量的な比較検討を経てからにしたい。

中国製磁器には白磁、青磁、天目、染付がある。天目は2点のみ出土している。白磁は端反りの皿（95～97）で、口径が10cm、13cm、20cmのものがある。蓋付は露胎で、砂付着している。硅砂付着のものもある。青磁は細蓮弁文碗で、當文、蓮弁文を細線で簡略化する。101はA地区7・8区のSE01一括出土の共伴遺物から、この時期まで伝世されたと考える。明染付は端反りの皿・碗、蓮子碗、饅頭心碗、筍基底皿がある。小野氏の分類〔小野1982〕では、皿B群、碗B群、皿C群、碗C群、碗E群がある。107は口銘の碗である。明染付では15世紀後半には見られ〔世界陶磁全集〕〔満岡1976〕の図版262〕、17世紀前半の伊万里染付碗の口銘に通じる〔大橋1984〕。106は見込みを輪状に釉を剝ぐ碗で、大阪城三の丸跡〔大手前1983〕でも見られるタイプで、16世紀後半であろう。染付の出現は一般には14世紀前半からであり、碗B群（107・108）は14世紀の後半～15世紀後、碗C・D群、皿B群、皿C群は15世紀後半から16世紀である〔小野1982〕が、108は共伴遺物から16世紀のものと考える。

弓庄Ⅷ期（第10図117～135）

弓庄Ⅷ期は在地産の越中瀬戸を主体とする時代で、唐津・伊万里などが加わる。16世紀後半を一部含みながら、19世紀まで及び、主体は江戸時代である。遺構としてはB地点3・4区SS609、F地点SB504などがある。

越中瀬戸の開始年代については古くから文献による研究が進められてきた。最近では定塚氏の研究成果は重要である。定塚氏によれば、天正18・19年頃、小二郎が前田安勝に招かれて上木に陶窯を築いて、越中瀬戸を始めたのである〔定塚1974・83〕。その説は文禄2年の彦右衛門を創始者とする従来の説〔山本1934、尾山1977〕に対して、少し古く溯らせている。しかし、これまでの研究は文献によるもので、初期の越中瀬戸の製品を考古資料として捉えられなかった。窯ごとの器種の組成や編年観など未解決な問題が多い。C地点4区の一括遺物は越中瀬戸を含んでいる点で重要である。越中瀬戸の起源をもう少し古く追溯させることができる。定塚氏の言う上木古陶に対応できるかもしれない。越中瀬戸の皿の特徴の1つに重ね焼きのための内剥げがある。この内剥げは美濃大窯Ⅱ期から出現するという。また、越中瀬戸の製品には志野釉を含まない（美濃大窯Ⅶ期以前）ことからも、上記の年代観を裏づけるものと考えたい。しかし、初期の窯の製品は器種組成が明確でなく、上記の製品との関連は不明である。

越中瀬戸には皿、天目茶碗、丸碗、広口壺、擂鉢、さや、陶鑊がある。皿には灰釉と鉄釉がある。付け高台はわずかで、削出し高台を主体とする。見込みは内剥げである。内面を丸ノミ彫りで、見込みに印花のある菊皿（119）、口縁部が外反する皿（120・121）、内面にロクロ成形の段を明瞭に残す皿（122）、口縁部が直立する皿（123）、回転糸切り底の捺釉皿（124）、ヒダ皿がある。印花文には菊が多いが、カタバミもある。119は初期の立山町山下窯、滑川市小森窯採集品と同じである。同様な付高台の皿は砺波市増山遺跡〔久々1977〕でもあり、この初期の製品の広範囲な広がりが見られる。擂鉢は口縁部の形状がⅣ期のC類と同じである。広口壺は鉄釉の鉄化粧がかかる。上市町正印新遺跡〔酒井1982〕では17世紀後半から18世紀前半の伊万里碗と共伴する越中瀬戸は120・121・123のタイプである。その他、16世紀後半～17世紀前半の唐津皿（131）、17世紀前半の133、後半の132、コンニャク印判の134の伊万里碗がある。（宮田）

註1 これまでに弓庄城跡出土の遺物については、瀬戸・美濃は名古屋大学教授檍崎峰一氏、瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗弘氏、伊万里・唐津は九州陶磁文化館係長大橋廉二氏。明染付は朝倉氏遺跡調査研究所小野正敏氏、大橋氏から種々の助言を得た。記して謝意を表す。また、越中瀬戸の初期の窯については県文化財審議委員会定塚武敏氏から種々の助言をいただいたが、その年代観については氏の承認を得ていない。今後、初期の越中瀬戸について詳しく記したいと考えている。

註2 檍崎峰一氏のご教授による。

2. 造構について（第1図・第11図・図版45）

本年度の調査で円庄城跡の調査は終了した。調査の範囲は本丸南側（E-1～3区）、本丸東側（F地点）、本丸西側（D地点）、本丸北側の第2の郭（C-6・7区）、第3の郭（B-1～5区）、西側外郭部分（A-1～8区）であった。以下、検出造構相互の関係、あり方について若干の考察を加えたい。

地形 円庄城は城の西側を流れる白岩川によって形成された河岸段丘上に立地する。段丘直下との比高差は約7mで南北に伸びる段丘である。段丘面では城跡を南北に走る町道を境にして西側は標高46m～49m、東側は標高50m～53mで約4mの比高差を持つ。城跡の東には若干低い地形が細長く続き、全体として見ると城は南北に細長い島状の地域に立地すると考えられる（第11図参照）。

掘立柱建物 掘立柱建物（以下建物という）は1次から5次までの調査で75棟を検出した。建物はD地点を除くすべての地点で検出され、1間×1間から4間×4間までのバテエティーを持っている。3間×3間以上の建物はA-1・3・5区、B地点において主体をなすが、他の地点ではほとんど見られなかった。間尺を考えると、3間×3間以上の建物は8～10尺（1尺が30cm）を連続して使用する傾向があり法則性を持つが、3間×3間未満の建物ではバラツキがあり一定ではない。遺物は全地区で12世紀から18世紀までのものが出土するが、中心的な時期は12世紀から13世紀代と、16世紀代といえる。ただし、A地点7・8区では14世紀代～15世紀代のものが目に付くが、全体から見るとその出土量はわずかと言える。12世紀から13世紀の遺物が多い地区はA-1・3・5・B地点で、16世紀代の遺物が多い地区は、C地点、D地点、E地点、F地点など本丸を中心とする地区であった。このことからA-1・3・5区、B地点の3間×3間以上の建物は12世紀から13世紀、C地点、E地点、F地点の3間×3間未満の建物はおむね16世紀代の建物と考えられる。

溝・井戸 溝は城内外を区画するもの（D地点SD001、B-3区SD607、C-4・5区SD1002、F地点SD510、C-6区SD1001）と城内部を区画するもの（A-1区SD119、A-7区SD02、B-5区SD806、B-4区SD706、C-1区SD902、C-2区SD001、E-1区SD001・002、E-3区SD201・211、F地点SD501、C-3区SD1230・4区SD1003・6区SD1001・SD1022・SD1046）その他、建物を区画する溝の3種類に分けることができる。このうち城内外を区画するF地点SD501、C-6区SD1001は一連のもので、「古城図」（図版25）の竜ヶ池に比定されるものと考えられる。なお幅は5～8m、深さ1.5～2mである。城内を区画するものでは、E-3区SD201はC-6区SD1002に、C-6区SD1022はC-7区SD1211にそれぞれ連なるものと考えられる。出土遺物は混在的で年代を決定するには至らない。しかしC-5とC-6区を区切るSD1001は細い溝を拡幅したもののようにあり、C-5区・6区の状況から拡幅の時期を16世紀後半におくことができよう。

井戸は直径約1m～2m、深さ1.5m～3mと大小さまざまである。構造は基本的には素掘りであるが、土質の軟弱な地域では、井側に石組みを施すもの、木製や石製のワクをはめるものなどさまざまである。井戸から出土する遺物は12・13世紀のものと16世紀のものがほとんどである。前者は1.5m～2mの深い井戸から出土し、後者は2m以上の深い井戸から出土する傾向を持っている。なお構造上の年代的差異はないものと考えられる。

建物と溝・井戸との関係 前述のように建物は12・13世紀代のものと16世紀代のものに大きく分けることができる。12・13世紀代の建物は、A-5区の建物群のように溝をほとんど伴わないものと考えられる。これに対して16世紀代の建物は溝で区画された郭内に築かれており、2～3棟の建物が幅30cm前後の溝で区画されたブロックに建てられる傾向がある。また井戸は、12・13世紀代の建物に付随するものは浅く、16世紀代のものは深いという傾向が強い。これは、12・13世紀代の地下水位が16世紀代に入り溝などの排水施設が作られたことにより低下したためと考えられる。また16世紀代の建物群が集約的に形成されることから、水の使用度が増大したのではないかとも考えられる。

以上から両時期の造構のあり方を比較すると、13・14世紀代は、建物が分散的でまとまりをもたないのに対し、16

世紀代では、建物が集約的で全体としてまとまりをもっているといえる。こうした意味において16世紀代の建物群は、規模、内容のちがいはあるものの福井県朝倉氏遺跡の町屋の景観を想起させると考えられる。12・13世紀代と16世紀代の建物が若干混在する地域もあるが、ほとんど本丸周辺地域に限られるようである。この地域では12・13世紀代と考えられる造構が破損を受けており、地形的に低い地域に断片的に残っている。このことからある時期に整地が行われたものと考えられる。その時期はC-5・6区の状況から16世紀代と考えられ、ここに1つの画期があるものと考えたい。

「古城之図」と検出遺構 発掘調査が行われる以前、城の規模・構造は『弓之庄古城之図』(図版45、以下「古城図」という)を基本上に語られてきた。ここで検出遺構、地形をふまえ「古城図」との対比を行ってみたい。「古城図」に表わされている郭を便宜上AからJ郭までに区分する。検出された遺構、地形から発掘区を対応させると、本丸はA郭、E地点はB郭、C-6・7区はC郭、C-1・3・4・5区はD郭、A-7区はE郭、A-1区・B地点はF郭、A-3区はG郭、A-5区はH郭にある。またD地点の土壘及びそれに伴う堀は、「是ヨリ堀ノ内一段高ク畔アリ」「水」とある部分に、F地点SD510は「竈ヶ池ト云」とある部分と対応する。遺構は、C-6区SD1001が、C郭・D郭の間の堀に、C-2区SD001は、D郭・F郭の間の堀にあたると考えられる。E地点以南では遺構が確認できることから「有沢星敷」とある部分はE地点である可能性がある。本丸(A郭)の規模は「古城図」の二十五間(45m)を東西とすると地形と一致する。「越登賀三州志」(富田景周、石川県図書館協会復刻1934)の伝には「本丸東西二十八間(50.4m)南北六十八間(122.4m)…」とあり現地形にほぼ一致する。「古城図」ではA・C・D郭を囲む堀が堅固な作りを示しているが、調査ではこれをがす遺構は確認できなかった。「古城図」は延宝9年(1681年)に作成されているが、こうした記載は一般的な近世城郭図の作図を踏襲したもので実際にはこのような作りではなかったと考えられる。しかし、C・D郭にある地区とE・F・G・H郭にある地区では前述のように前者が16世紀代、後者が12・13世紀代にそれぞれ時期的主体があることから、この記載の意味が今後の問題の1つとなる。

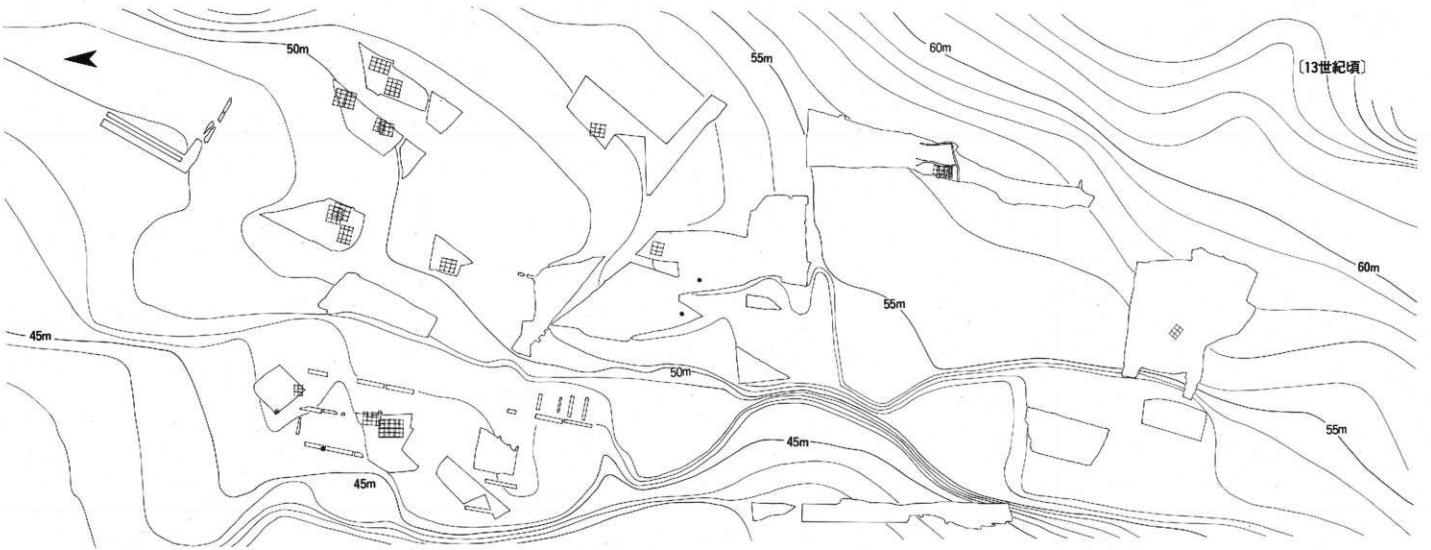
時代的背景と城の成立 城の成立はこれまで15世紀中頃とする説(高岡1982)、南北朝の頃堀江庄に入部した土肥氏が上市川・白岩川流域の井見荘の方に勢力を移した時とする説(石原1977)、(15世紀末から16世紀初頭と考えられる)などがある。筆者自身、これまで城の成立は15世紀末頃と考えてきた(高岡1982)。しかし、城全体の検出遺構、出土遺物の状況を考えると居城としての弓庄城は16世紀初頭以上には遡らないものと考えられる。それは15世紀代の遺構・遺物の検出数が城全体を通してみるとあまりにも少なすぎる点、本丸を中心とする地区が整地を受けており、その時期が16世紀代で検出遺構也非常に多い点などにその根拠を求めたい。文献から土肥氏がこの地域に進出したことを示す記事は、永禄3年(1506年、統本朝通鑑)に初出しており、これ以前の15世紀中頃から末にかけては堀江荘に居をおく土肥氏が伝領関係の変化から井見荘に進出せざるを得なくなる時期と考えられている(久保1977)。しかし、このことは土肥氏の井見荘進出を直接示すものではなく、進出のための政治的立場を段階的に強化することを示すものと考えたい。したがって15世紀中頃から末にかけては井見荘で城を築けるだけの条件が土肥氏になく、明確な遺構・遺物が検出されないものと思われる。

城内から検出される遺構・遺物のうち12・13世紀代のものは、井見荘成立以前にあったといわれる日置荘に関連した施設があったものと考えられる。日置荘は現在の立山町口日(白岩川の対岸)にあった日置社の社領でその発生は12世紀中頃であると考えられている(石原1956)。しかし遺構・遺物の減少する14世紀から15世紀にかけて弓庄城周辺地域がどのような状況にあったかは明確でなく今後の研究をまたねばならない。また城内で検出される遺構・遺物が本丸周辺地域(B・C・D郭)とその他の地域(E・F・G・H郭)で様相が異なる点についても、城内と認識されていた範囲がどこまでであったかという問題を提起しており今後の検討が必要である。

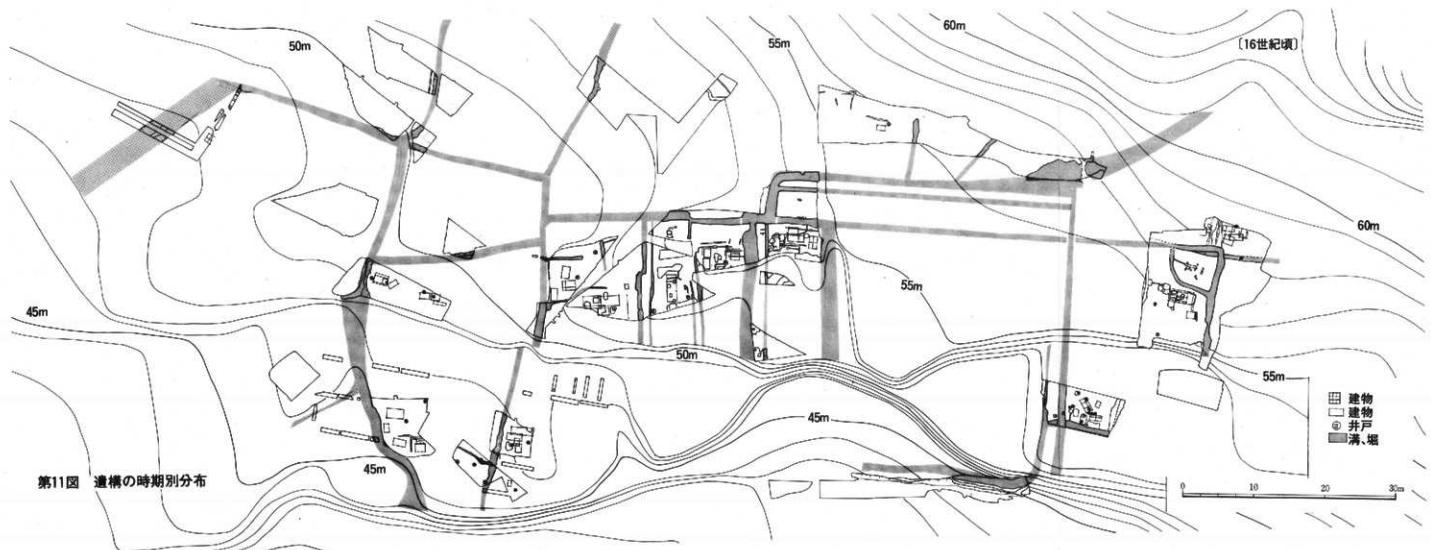
(高岡)

—引用・参考文献—

- ア 朝倉氏遺跡調査研究所 1975 「特別史跡一乘谷朝倉氏遺跡Ⅳ」
- イ 石原与作 1956 「白岩川中流域の歴史的事実一弓庄・守田郷の研究一」
- 井上喜久男 1983 「大阪城三の丸跡における初期近世室の様相」 「大阪城三の丸跡」
- ウ 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」 「貿易陶磁研究No.2」 日本貿易陶磁研究会
- 上野章・岸本雅敏・池野正男・久々忠義 1982 「富山県小矢部市日の宮遺跡発掘報告書」 富山県教育委員会
- オ 大手前女子大学史学研究所 1983 「大阪城三の丸跡Ⅱ」
- 大橋康二 1981 「15・16世紀における日本出土の青花碗に関する編年試案(1)」 白水No.8
- 大橋康二 1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」 「北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁」 九州陶磁文化館
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」 「貿易陶磁研究No.2」 日本貿易陶磁研究会
- 尾山京三 1977 「越中焼物シリーズNo.1 越中漁戸焼」 越中漁戸焼保存会
- カ 野野 雄 1982 「若宮B遺跡」 「北陸自動車道遺跡調査報告立山町土器・石器編」 富山県教育委員会
- 龜井明徳 1980 「日本出土の時代青磁碗の変遷」 「鏡山猛先生古稀記念文化論叢」
- 龜井明徳 1983 「沖繩出土の中国陶磁(下)」 沖繩県立博物館
- 神岡町教育委員会 1979 「江馬氏城館跡発掘調査概報」
- キ 岸本雅敏 1982 「香城寺遺跡の調査」 福光町教育委員会
- ク 岸本雅敏 1984 「蓮花寺遺跡の調査」 婦中町教育委員会
- ク 久保尚文 1982 「白岩川流域諸莊園の一考察-高野莊を中心に-」 「かんとりいNo.6 越中の歴史と文化を考える会
- 久々忠義 1977 「増山遺跡」 「富山県砺波市裕根野遺跡群子備調査概要」 砺波市教育委員会
- 久々忠義 1984 「紙樹寺裏出土の土器」 「大境」 第8号
- コ 小島俊彦 1974 「北陸の織文時代中期の編年-戦後の研究と現状-」 「大境」 第5号
- サ 酒井重洋・神奈孝造・橋本正春・松島吉信・高慶孝 1981 「富山県上市町弓庄城跡緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 酒井重洋・橋本正春・高慶孝 1982 「富山県上市町弓庄城跡第二次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 酒井重洋・山本正敏・宮田進一・松島吉信・高慶孝 1983 「富山県上市町弓庄城跡第3次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 酒井重洋・宮田進一・松島吉信・高慶孝 1984 「富山県上市町弓庄城跡第4次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- 酒井重洋 1982 「正印新遺跡」 「北陸自動車道遺跡調査報告-上市町土器・石器編」 上市町教育委員会
- 酒井重洋 1985 「富山県八尾町長山遺跡・金ヶ峰古窯跡緊急発掘調査概要」 八尾町教育委員会
- シ 志道和直 1977 「草戸千軒町跡出土の土器質土器編年試案」 草戸千軒ニュースNo.48
- 定塚武敏 1974 「越中の焼きもの」 巧玄出版
- 定塚武敏 1983 「越中のやきもの」 「日本やきもの集成4」 北陸 平凡社
- タ 高岡 敏 1980 「富山県」 「日本城郭大系」 7 新人物往来社
- 高岡 敏 1982 「富山県上市町柿沢城と國人土岐氏の城館配図」 「かんとりいNo.6 越中の歴史と文化を考える会
- 田口昭二 1983 「美濃焼」 ニュー・サイエンス社
- 田中照久 1981 「越前編年表」 「日本やきもの集成4」 北陸 平凡社
- ナ 椎崎彰一・井上喜久男 1976 「岐阜県土岐郡笠原町妙寺窯跡発掘調査報告」 笠原町教育委員会
- 椎崎彰一 1977 「瀬戸」 「世界陶磁全集3」 小学館
- ハ 橋本正春・宮田進一 1982 「神田遺跡」 「北陸自動車道遺跡調査報告上市町土器・石器編」 上市町教育委員会
- 服部寛喜 1984 「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年の位置づけについて」 「神奈川考古」 第19号
- フ 藤澤良佑 1976 「瀬戸窓出土遺物編年図」 「瀬戸市史」 陶磁史篇第二巻 瀬戸市
- 藤田富士夫・古川知明 1981 -83・84 「白鳥城跡試掘調査概要(1)~(3)」 富山市教育委員会
- ホ 貿易陶磁研究会 1984 「第4回 貿易陶磁研究会発表資料」
- マ 松藤和人 1978 「同志社キャンパス内出土の土器と陶磁器の編年」 「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物II」
- 松島吉信 1984 「中世」 「富山県婦中町坂出遺跡調査報告書」 婦中町教育委員会
- 九月町教育委員会 1981 「壺原寺跡II 藏院跡第2次発掘調査概報」
- ミ 満岡忠成 1976 「青花鉢の子茶碗」 「世界陶磁全集・明」 第14巻 小学館
- 宮田進一 1984a 「県内出土の中世土器編年図」 「北陸自動車道遺跡調査報告-上市町木器総括編」
- 宮田進一 1984b 「土器質土器について」 「富山県上市町弓庄城跡第4次緊急発掘調査概要」 上市町教育委員会
- モ 森田 勉 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」 「貿易陶磁研究No.2」 日本貿易陶磁研究会
- ヤ 山本久作 1934 「越中製陶史稿」
- 山本正敏 1982 「瓦遺物」 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(5)」 入善町教育委員会
- ミ 横田洋三 1981 「出土土器編年試案」 「平安京跡研究調査報告」 第5編 古代学協会
- 横田賀次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」 「九州歴史資料館研究論集4」 九州歴史資料館
- 吉岡康輔・平田天秋 1976 「第四回 球洲古窯跡」「珠洲市史」 第1巻 珠洲市
- 吉岡康輔他 1977 「珠洲法住寺第3号窯」 石川県教育委員会
- 吉岡康輔 1981a 「中世陶器の生産と流通」 考古学研究108号
- 吉岡康輔 1981b 「北東日本海域における中世陶磁の流通」 月刊文化財No.215
- 吉岡康輔 1982 「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」 「庄内考古学」 第18号 庄内考古学研究会
- 吉岡康輔 1983 「珠洲系陶器の層年代標準資料」 「北陸の考古学」
- 四柳嘉章 1980 「中世雜器-土器質土器-の編年」 「西川島」 穴水町教育委員会



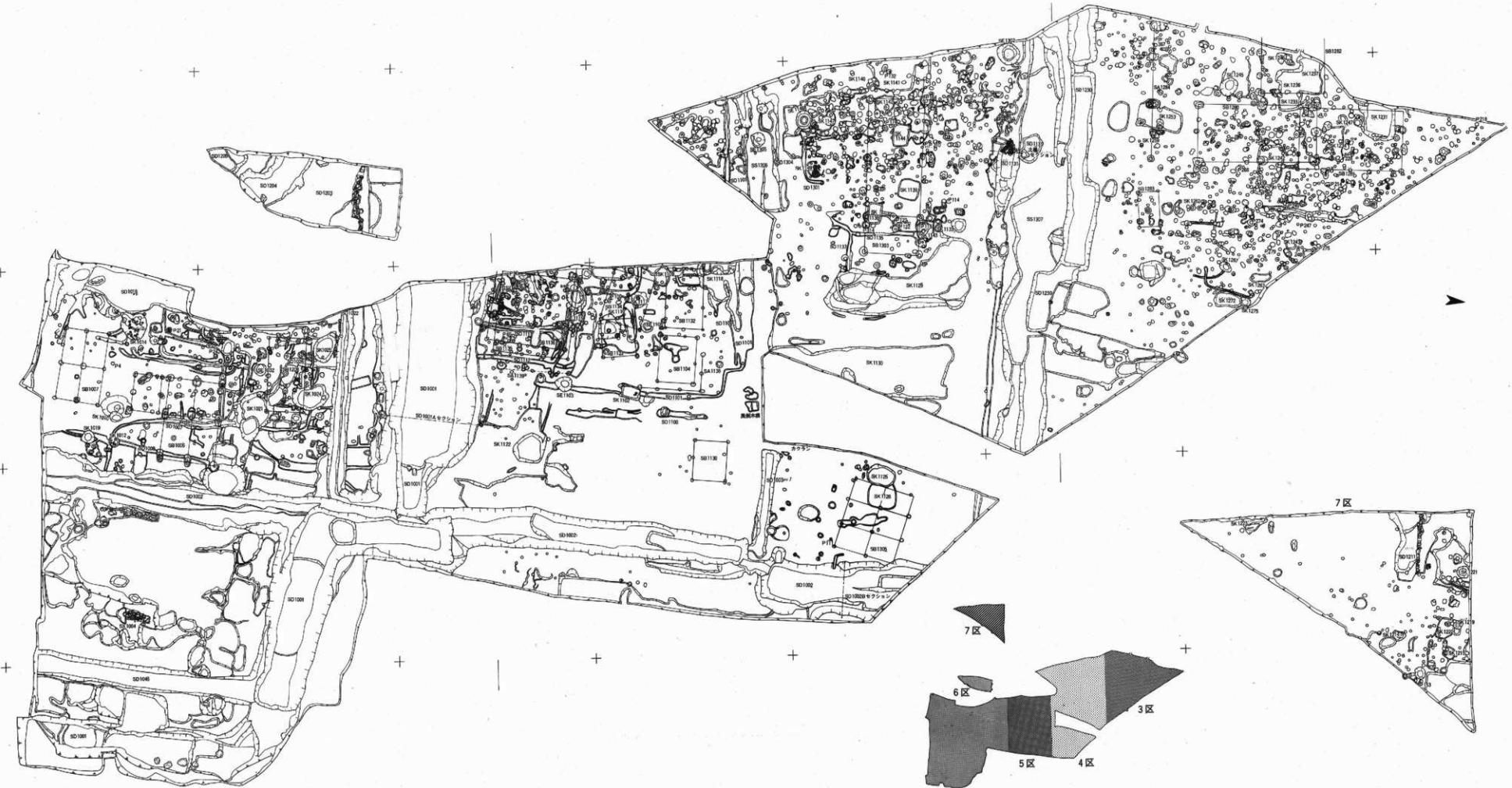
[13世紀頃]



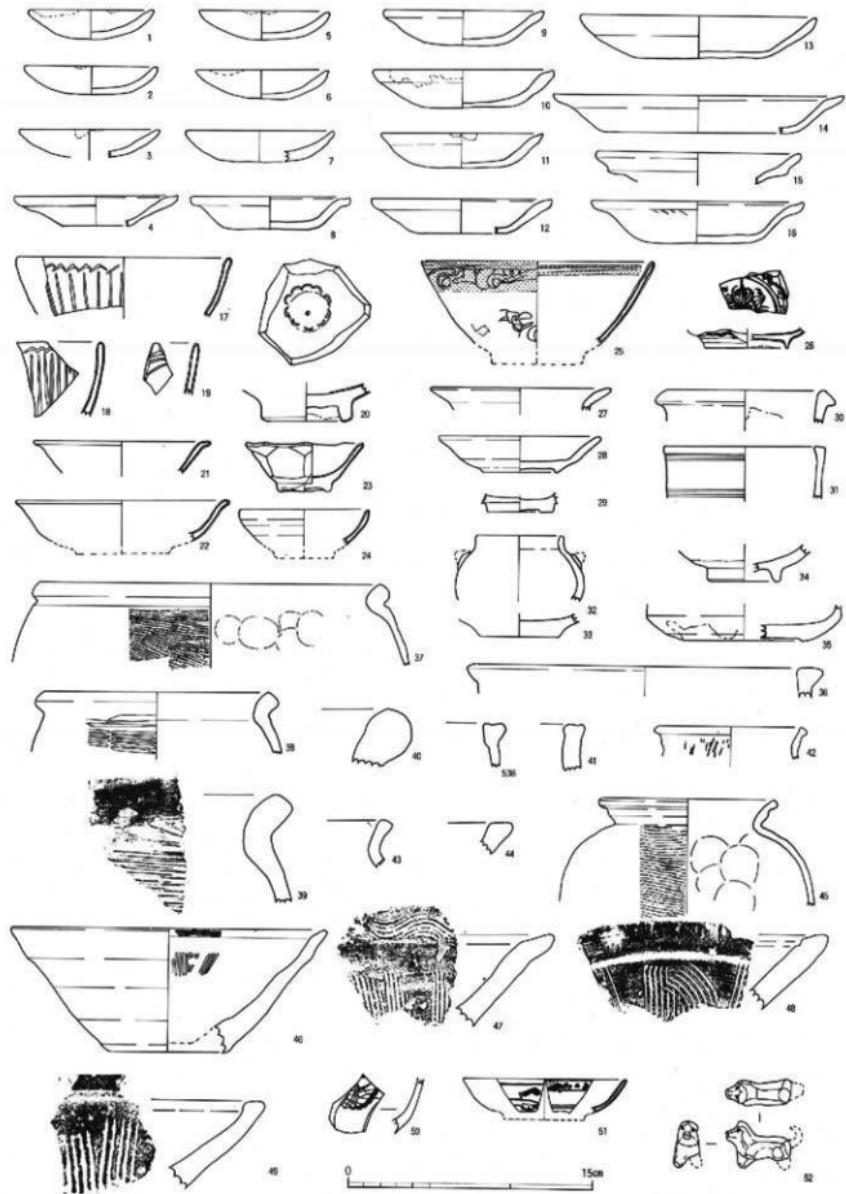
田 建物
□ 井戸
■ 溝、堀

第11図 造構の時期別分布

0 10 20 30m

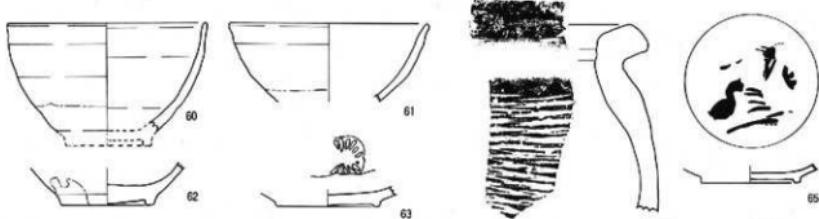
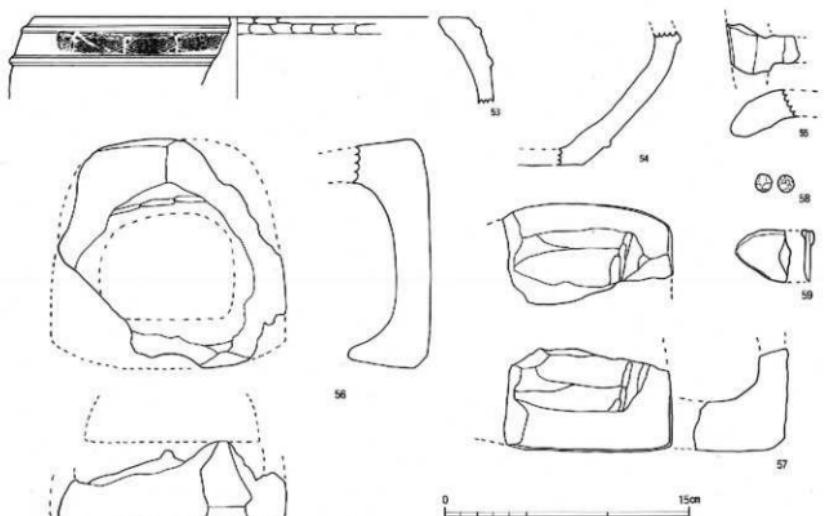


図版1 C地点3・4・5・6・7発掘区 (1/300)



圖版2 C地點3區出土遺物(1) 1/3

SD1230(26·40) SK1231(13·14) SK1233(44·51) SK1234(7) SK1242(12·37) SK1246(47) SK1253(4)
SK1259(11) SK1262(3) SK1267(16) SK1275(52) P204(23) P205(9·10) P214(1·2) P218(24·27)
P228(29) P237(20) P247(5·6) P248(39) P249(18) P274(42) P275(46) P282(15) P362(28)



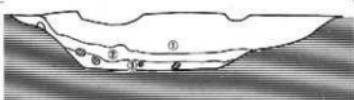
A. SD1001A セクション

- (1)茶褐色土(混入)
 (2)黒褐色土
 (3)灰茶褐色土(やや砂質で小砾が若干混入)
 (4)淡黄褐色土
 (5)茶褐色土
 ④色調が(解)通りやや暗い
 ⑤⁺
 ⑥⁺解より砂質が強い
 ⑦⁺
 ⑧⁺層に近いが粘質土が混入
 (6)茶黒褐色土(上層に褐色粘質土ブロックはない)
 (7)褐黑色土
 (8)暗茶黒褐色土(層に近いが粘質)
 (9)淡茶黒褐色土
 (10)淡灰茶褐色土
 ⑨⁺
 ⑩⁺ (D)層より暗い
 (11)茶黑褐色土
 ⑪⁺
 ⑫⁺ (D)層に近いが砂目やや荒い
 (13)淡茶褐色粘質土(黒褐色土が混入)
 ⑬⁺
 ⑭⁺ (D)層に近いが砂目やや暗い
 ⑮⁺
 ⑯⁺ (D)層よりもさらに暗い)
 (18)茶黒褐色粘質土(茶褐色土に混入)
 (19)茶黒褐色粘質土(茶褐色土に混入)

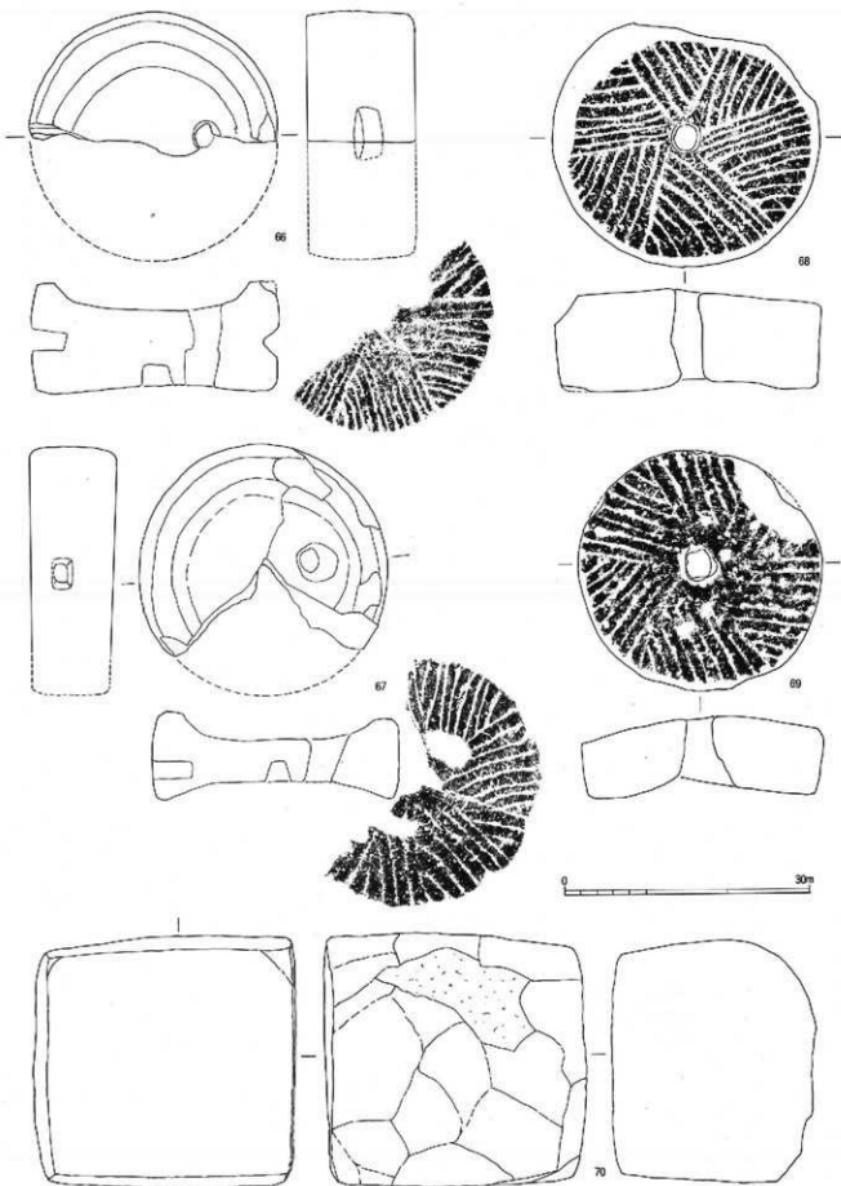
木製品など造物
を含む

三

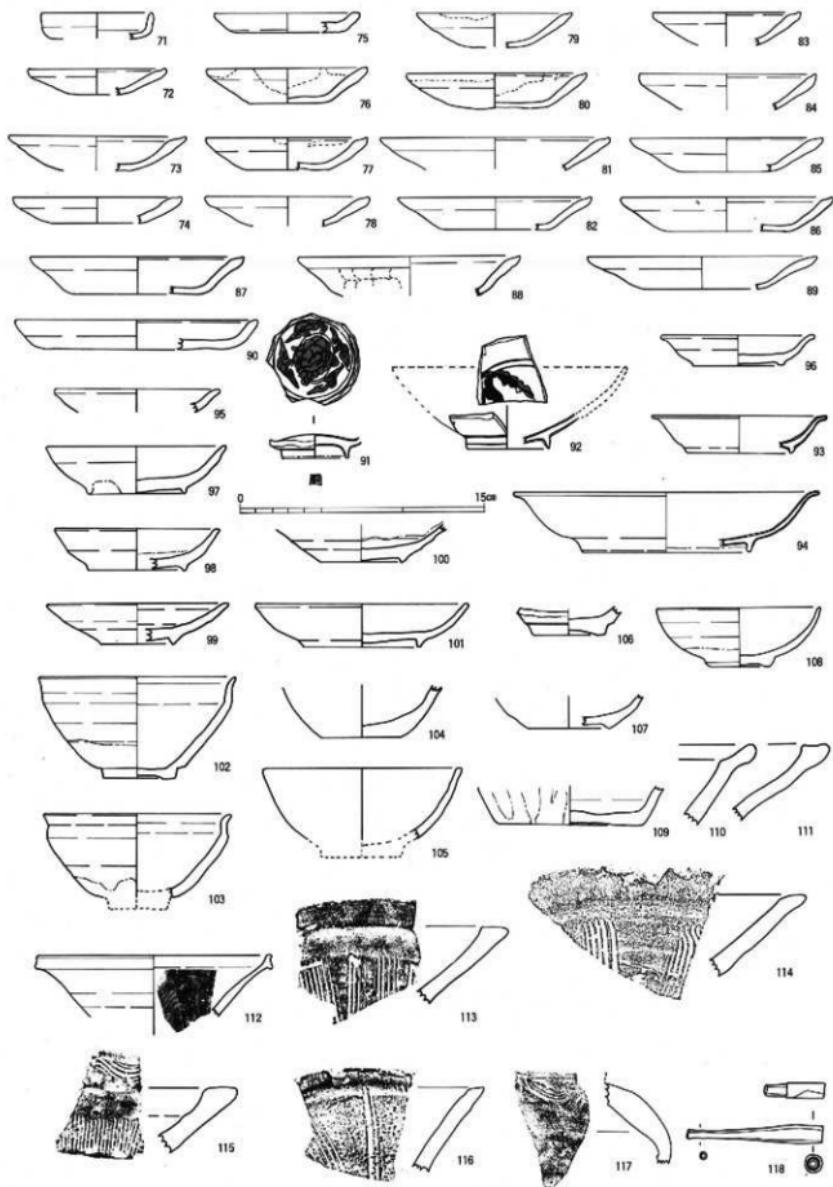
- ①深灰黑色粘質土、褐色粘質土の小プロックがしもふり状に混入)
 - ②灰黑色土(淡黃褐色粘質土プロックがしもふり状に混入)
 - ③深灰黑色粘質土
 - ④中褐色砂質土・礫混入)
 - ⑤深褐色砂質土
 - ⑥深灰黑色粘質土
 - ⑦深灰黑色粘質土(泥炭混入、粘性強い)



図版3 C地点3区出土遺物(2)1/3と遺構土層セクション

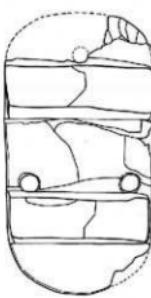
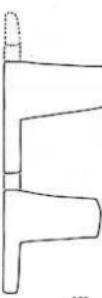
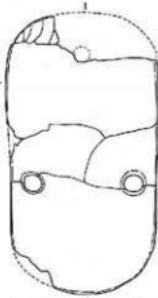
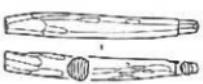
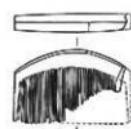
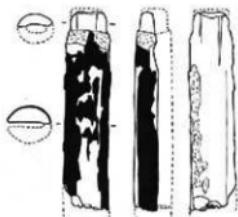
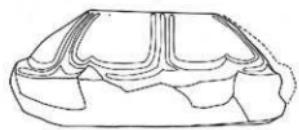
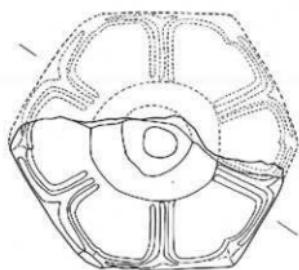


図版4 C地点3区出土遺物(3)1/6
SD1230(66・68・69・70) SK1242(67)

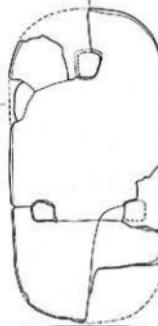
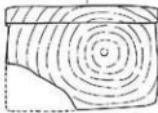


图版5 C地点4区SD1002出土遗物(1) 1/3

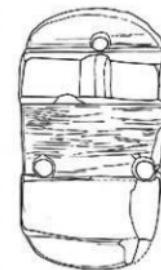




123



124

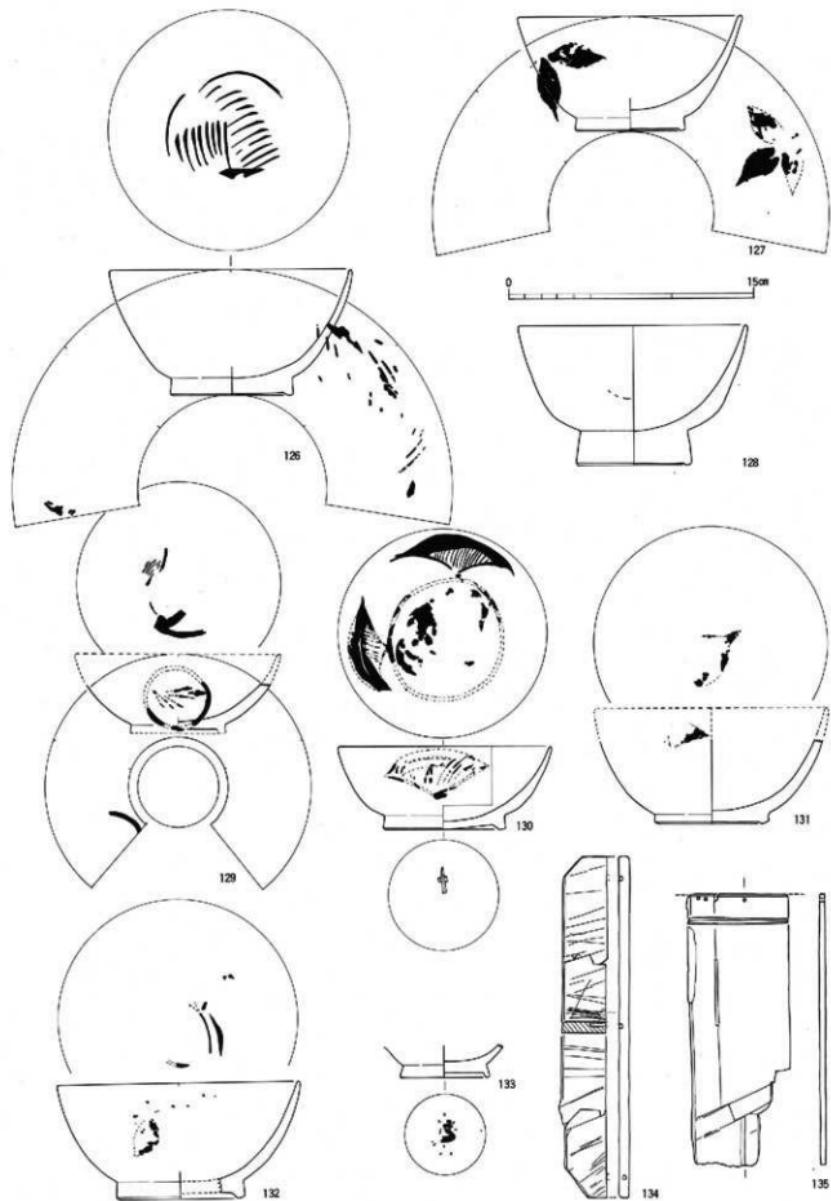


125

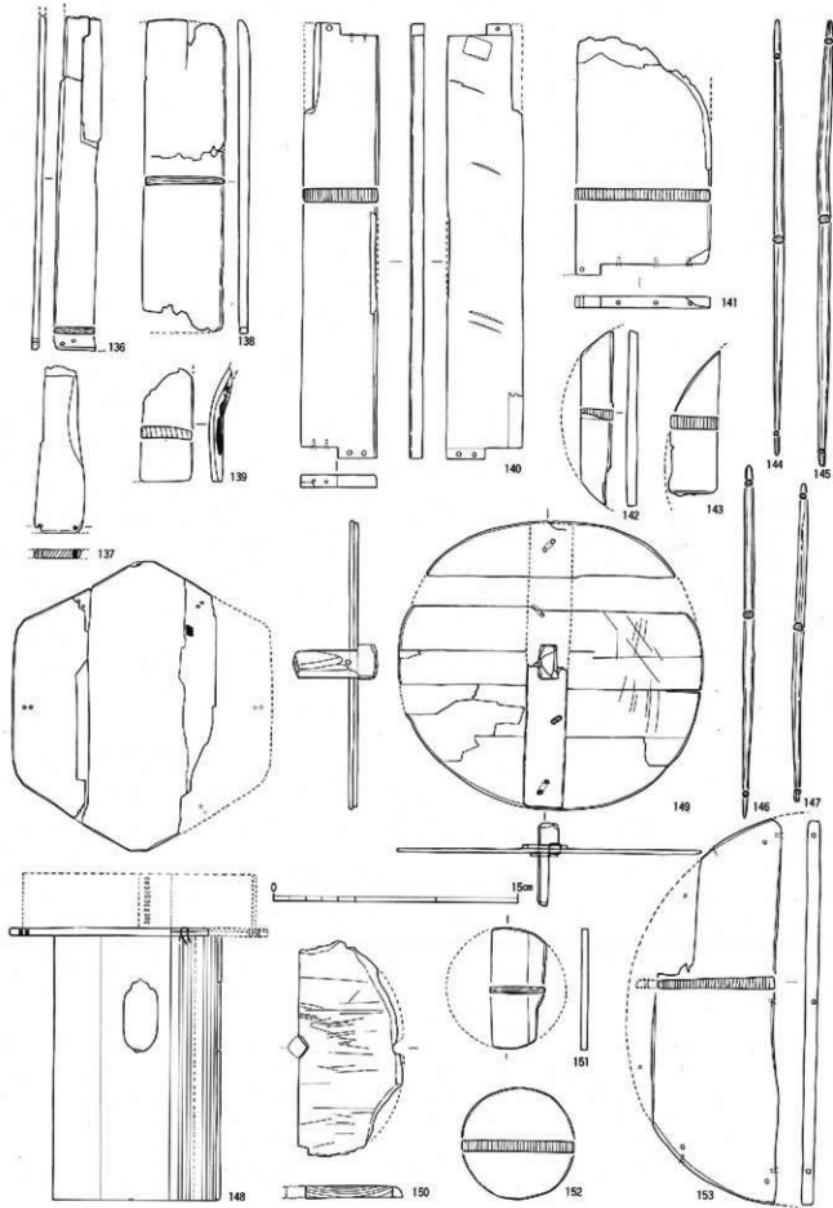
0

15cm

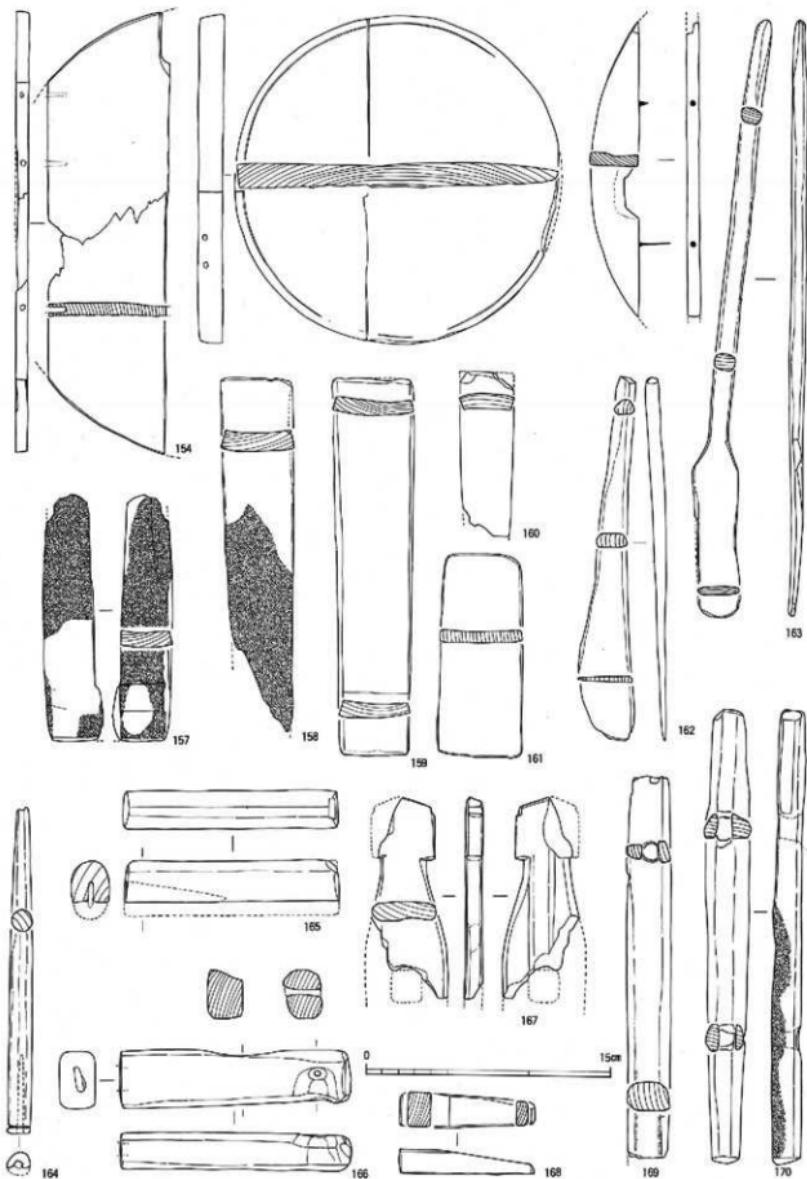
図版6 C地点4区SD1002出土遺物(2) 1/3 119はX40~45、Y120~125は出土1/6



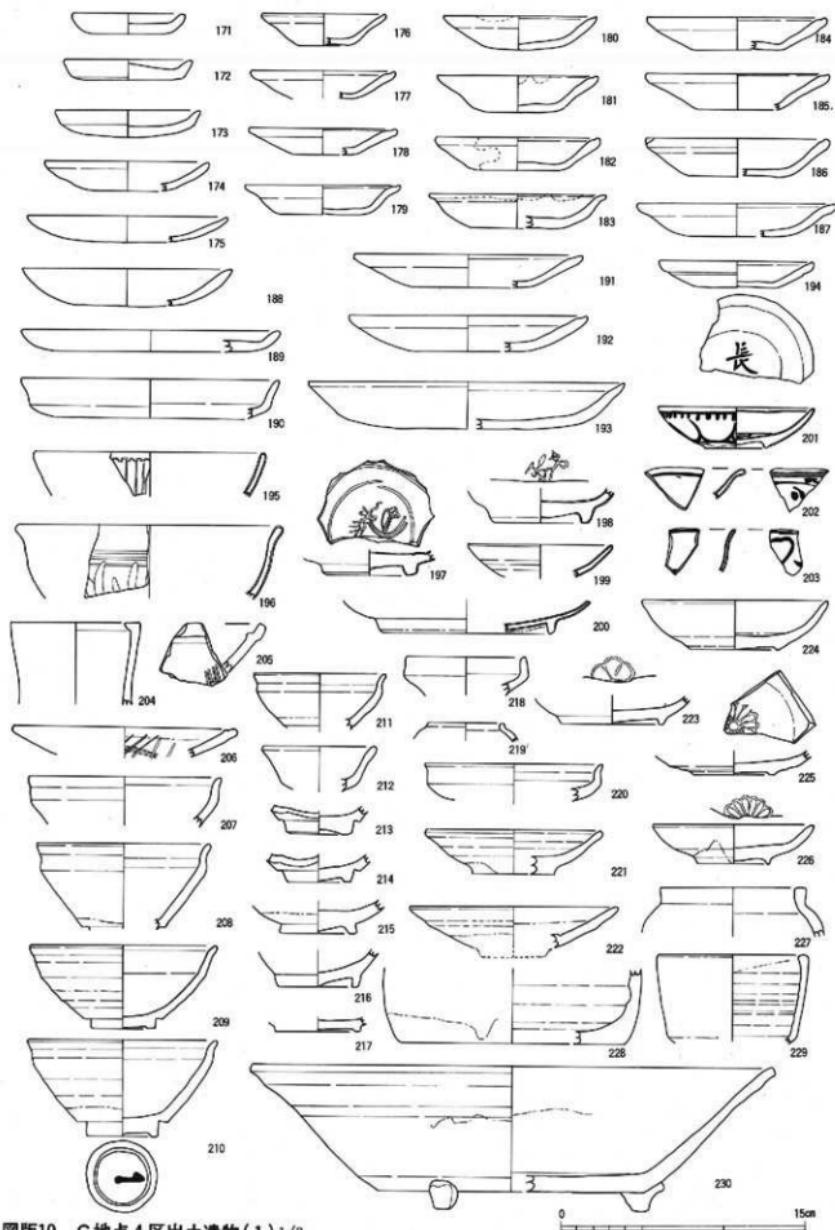
图版7 C地点4区SD1002出土遗物(3) 1/3



図版8 C地点4区SD1002出土遺物(4)1/3

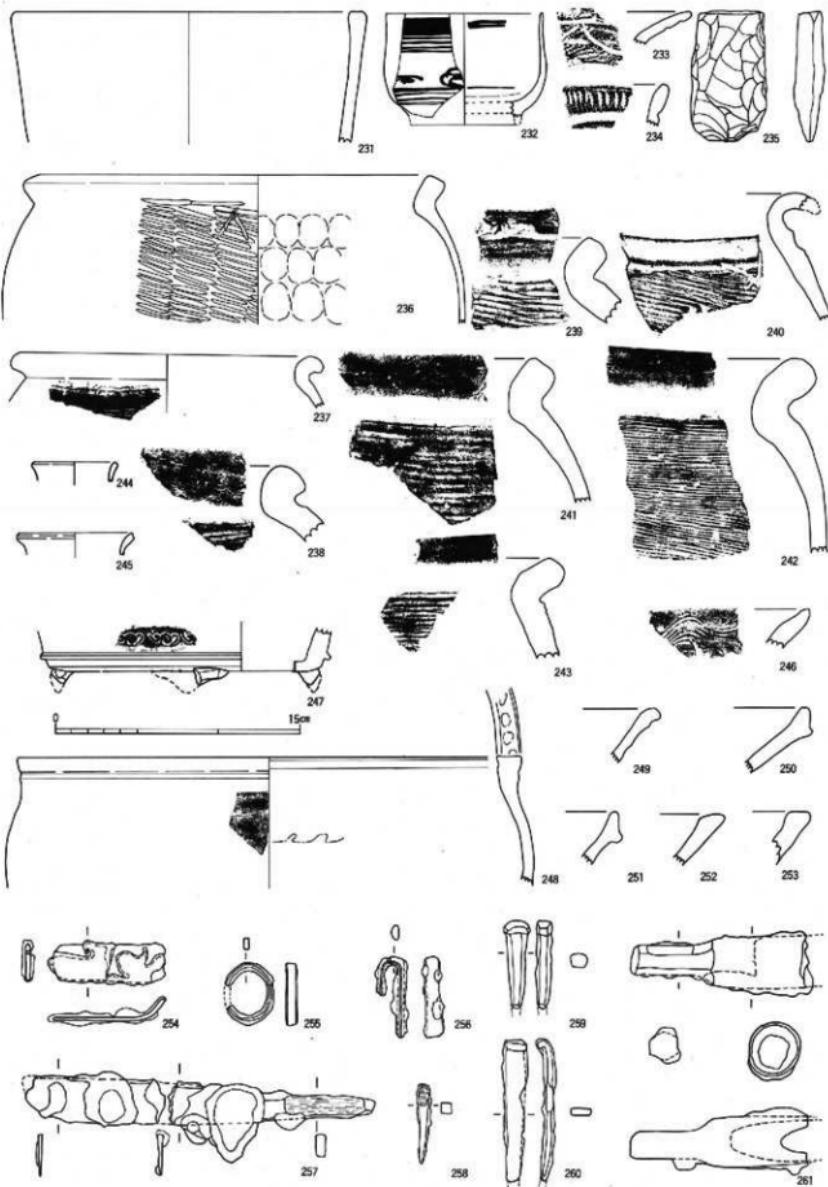


図版9 C地点4区SD1002出土遺物(5)1/3



図版10 C地点4区出土遺物(1)1/3

SD1106(201) SK1125(188) SK1126(176) SD1131(177~180・182・191・193・204・206・209) SK1140(186・187・192)
SK1141(202・214・229) SK1147(224・226) SE1148(184) SK1149(217) SE1302(224) P111(189・190) P114(211)
P132(228) P174(181) P184(208)

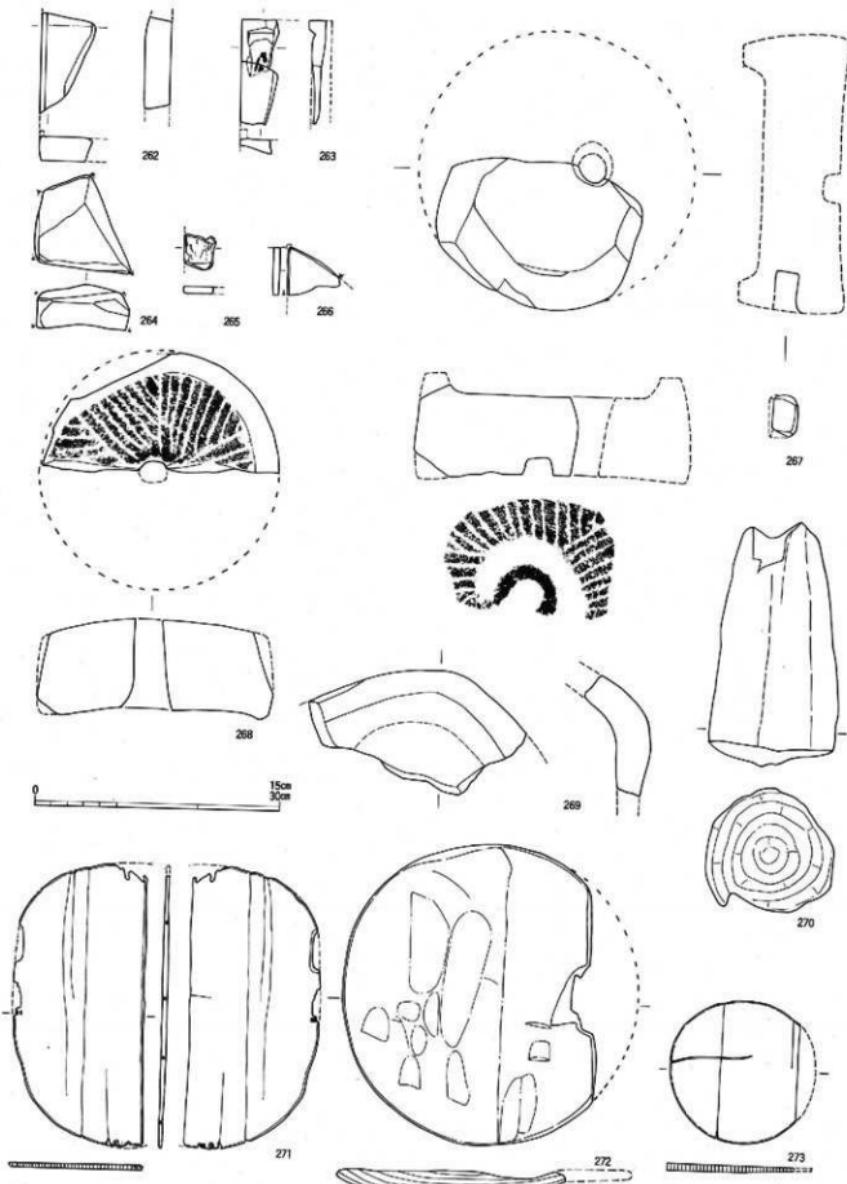


图版11 C地点4区出土遗物(2)1/3

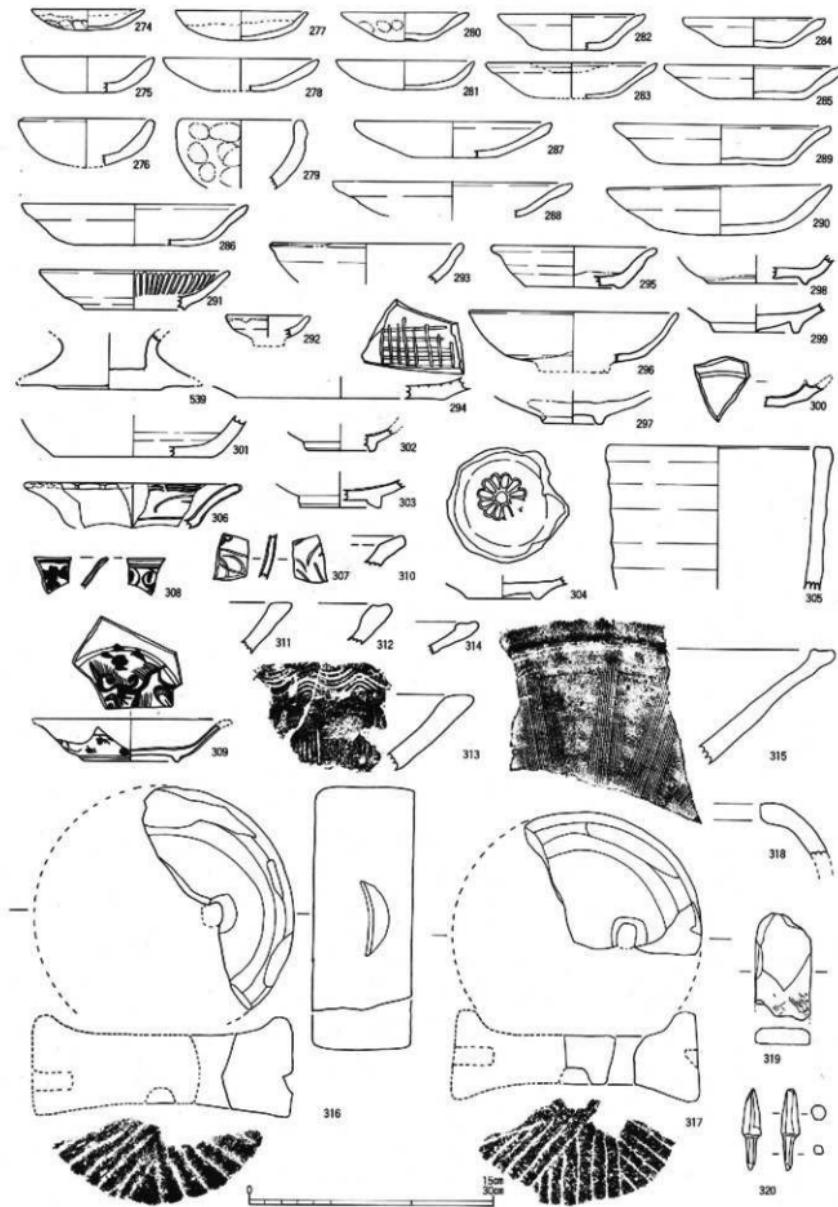
SD1002(236·247) SK1117(252) SD1128(248) SK1129(236·251·253·258) SK1130(231·257)

SD1131(232·245·246·248·254·261) SK1133(236) SK1134(236) SK1141(256) SE1148(240)

SE1302(236·259) P115(242) P164(258) P310(235)

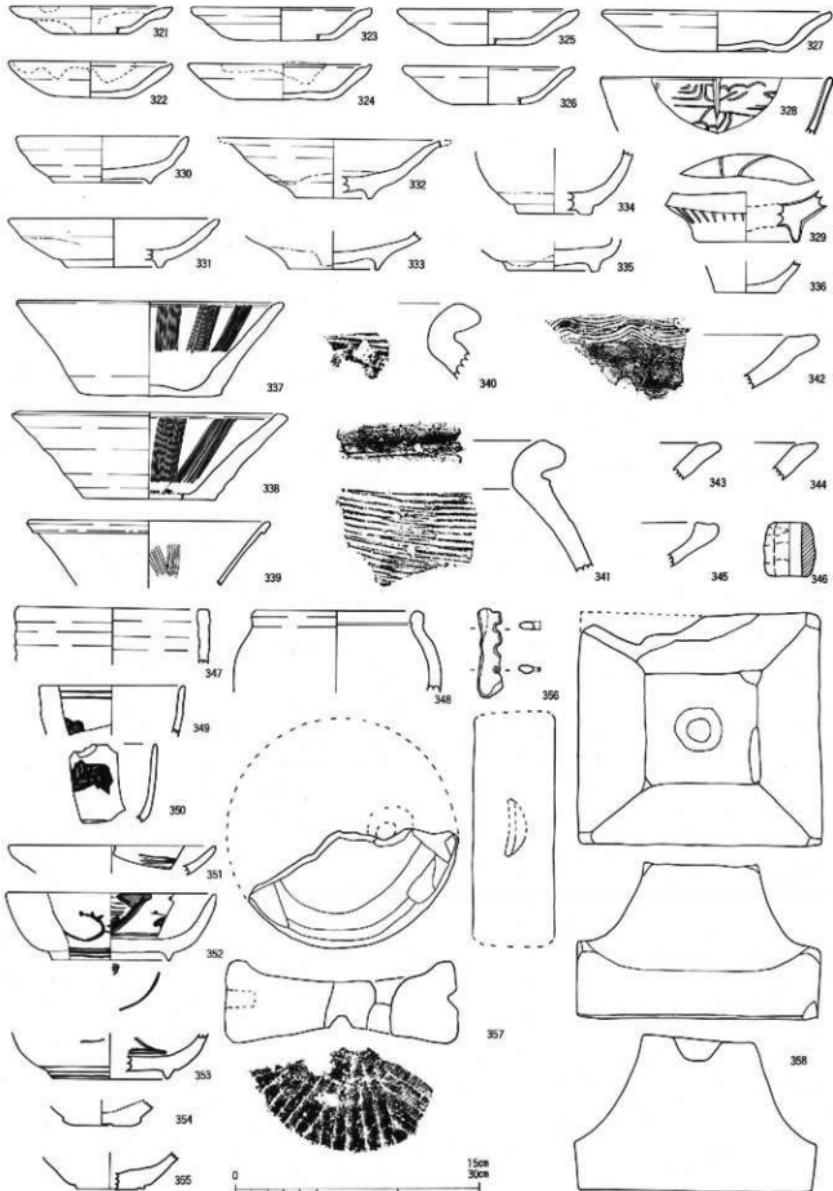


図版12 C地点4区出土遺物(3) 262~266・272・273は1/3、267~271は1/6
SD1131(263・264・267・269) SK1149(266) SK1138(268) SD1003(271・273) SE1148(272)

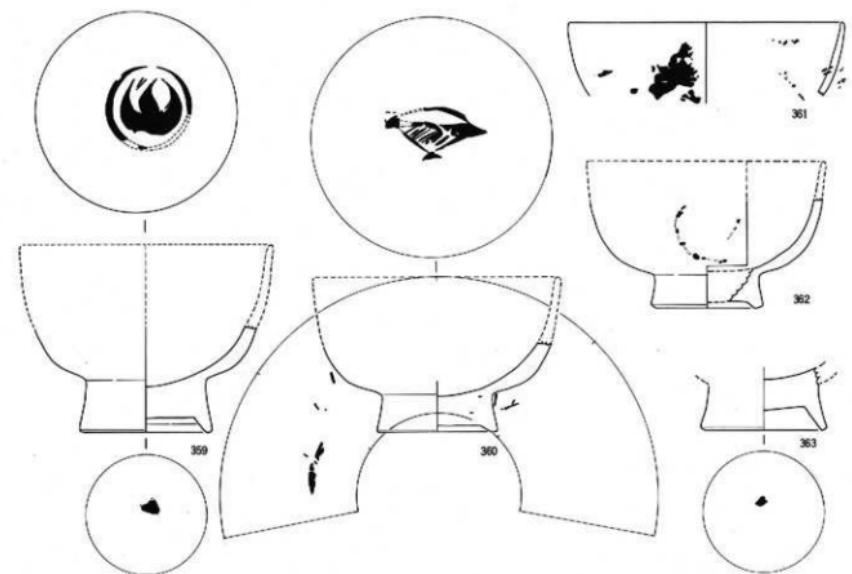


图版13 C地点5区出土遗物1/3、316-317±1/6

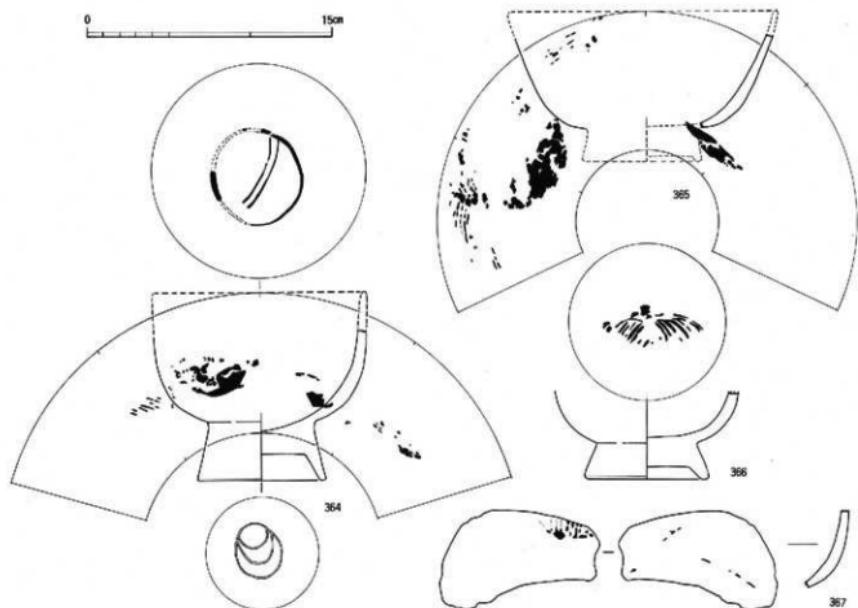
SD1046(290) SD1101~1106(298·305) SK1102(285·289·291·316·317) SD1106(286·308) SK1108(310)
 SK1109(277·281·319) SK1110(312) SD111(282·311) SD1112(295) SK1115(278·318) SK1118(275)
 SK1121(209·302) SK1122(283) SK1123(313) P65(309) P89(284) P90(287) P92(274) P100 (280·288)



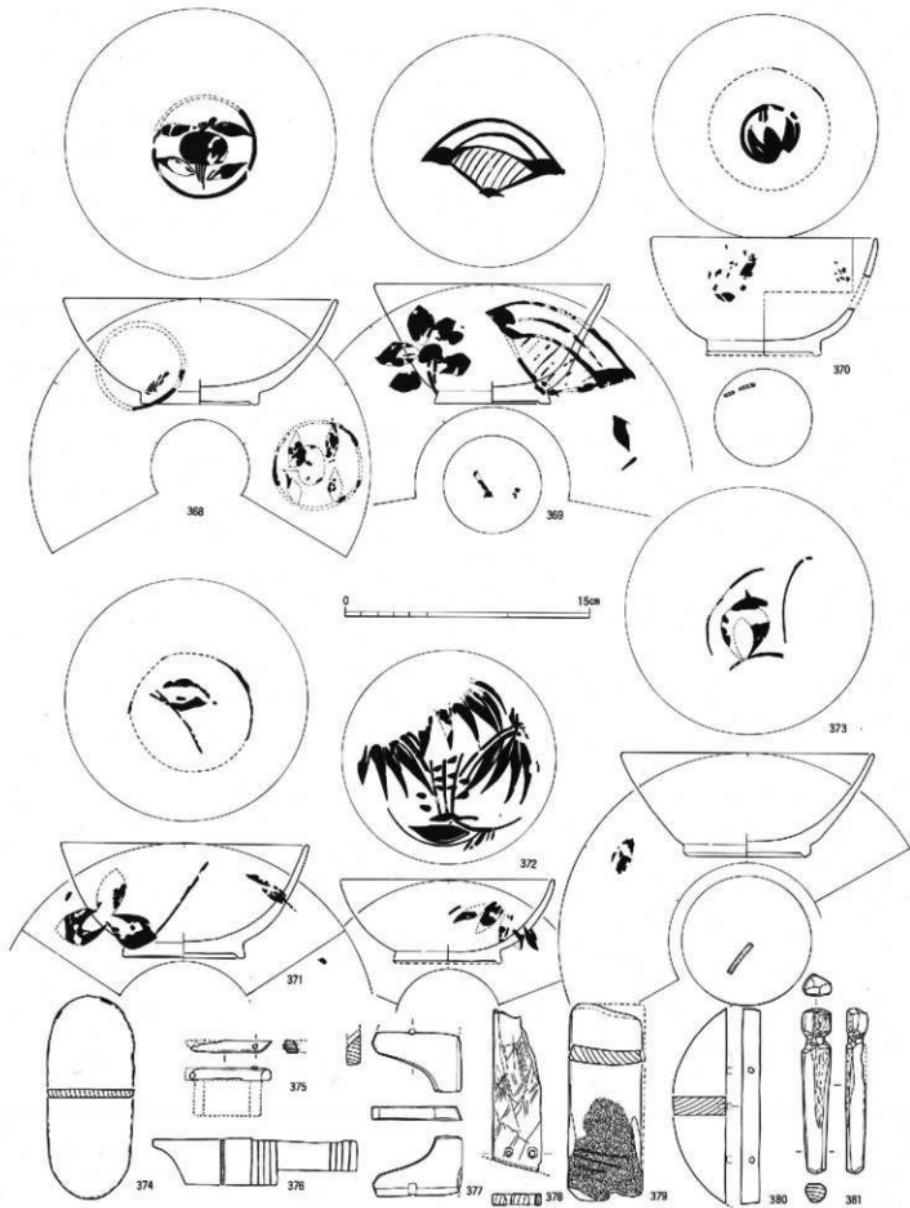
図版14 C地点6区SD1001出土遺物(1)1/3 357・358は1/6



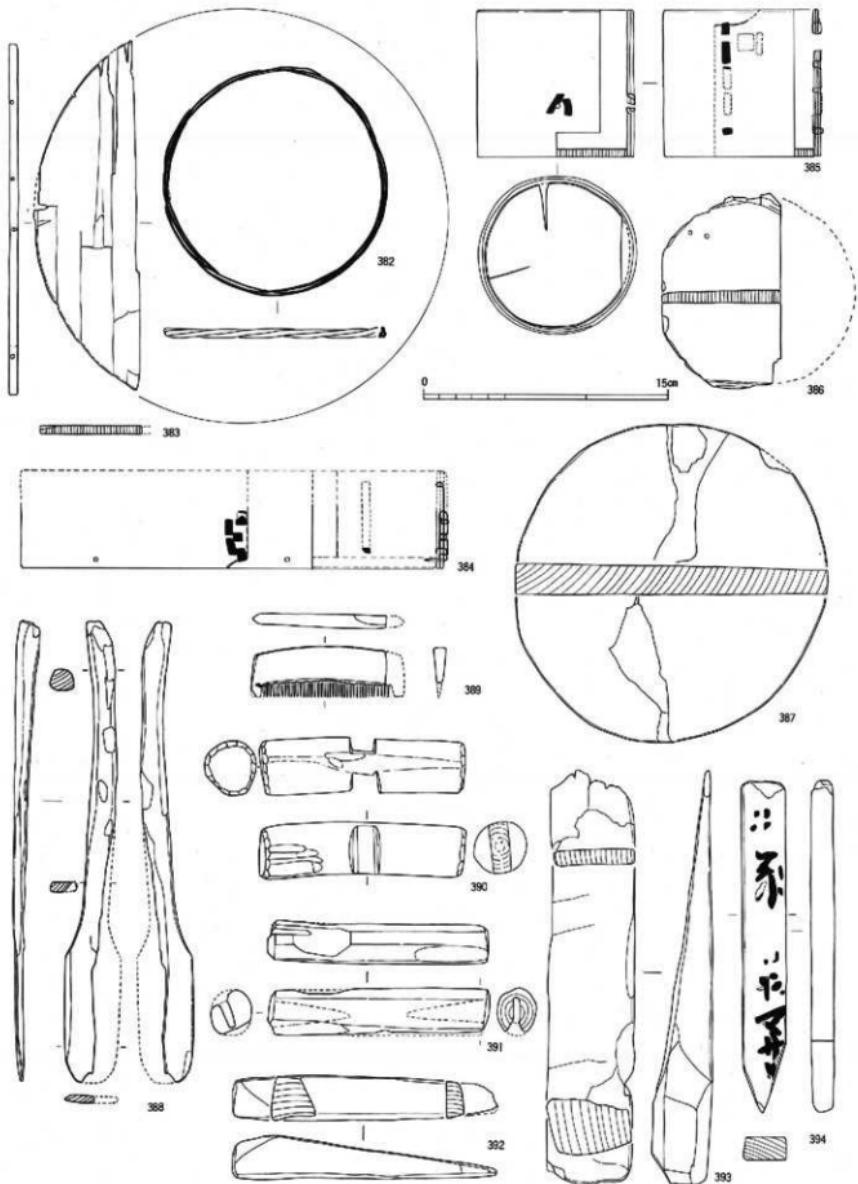
0 15cm



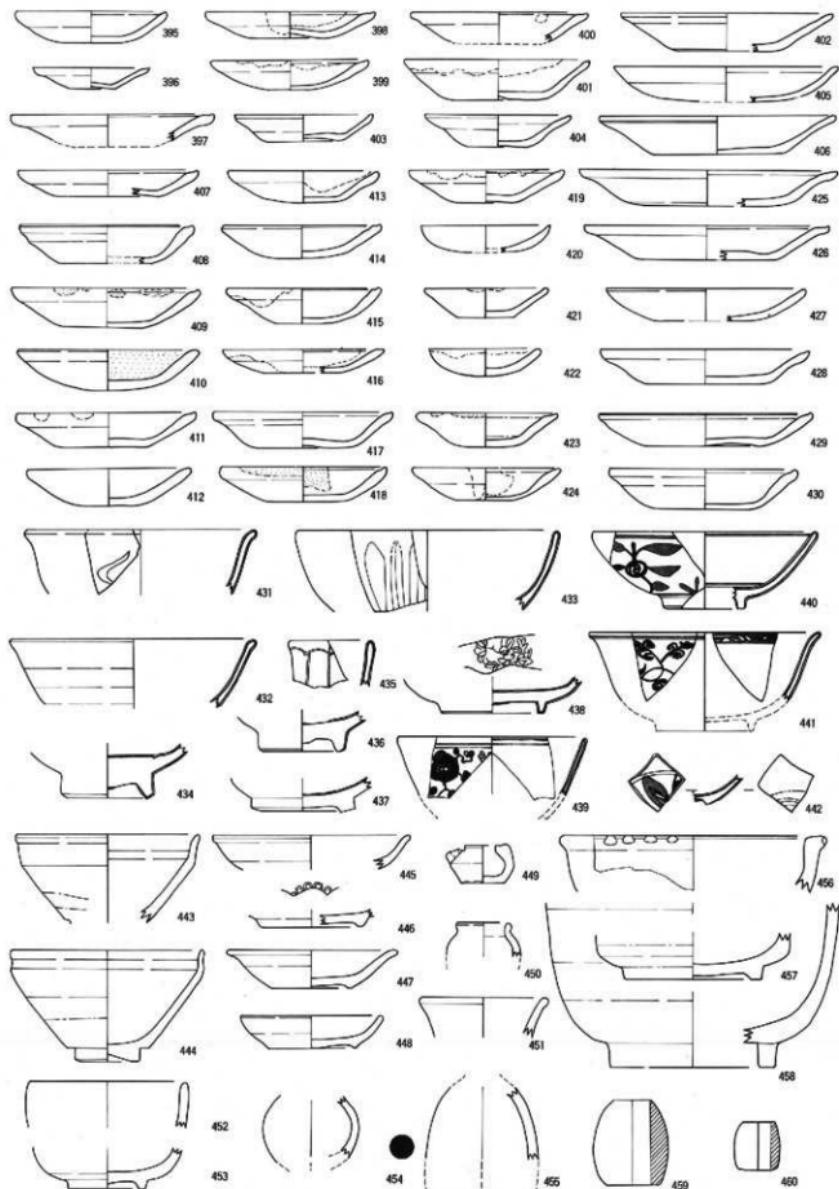
图版15 C地点SD1001出土遗物(2)1/3



图版16 C地点SD 1001出土遗物(3) 1/3

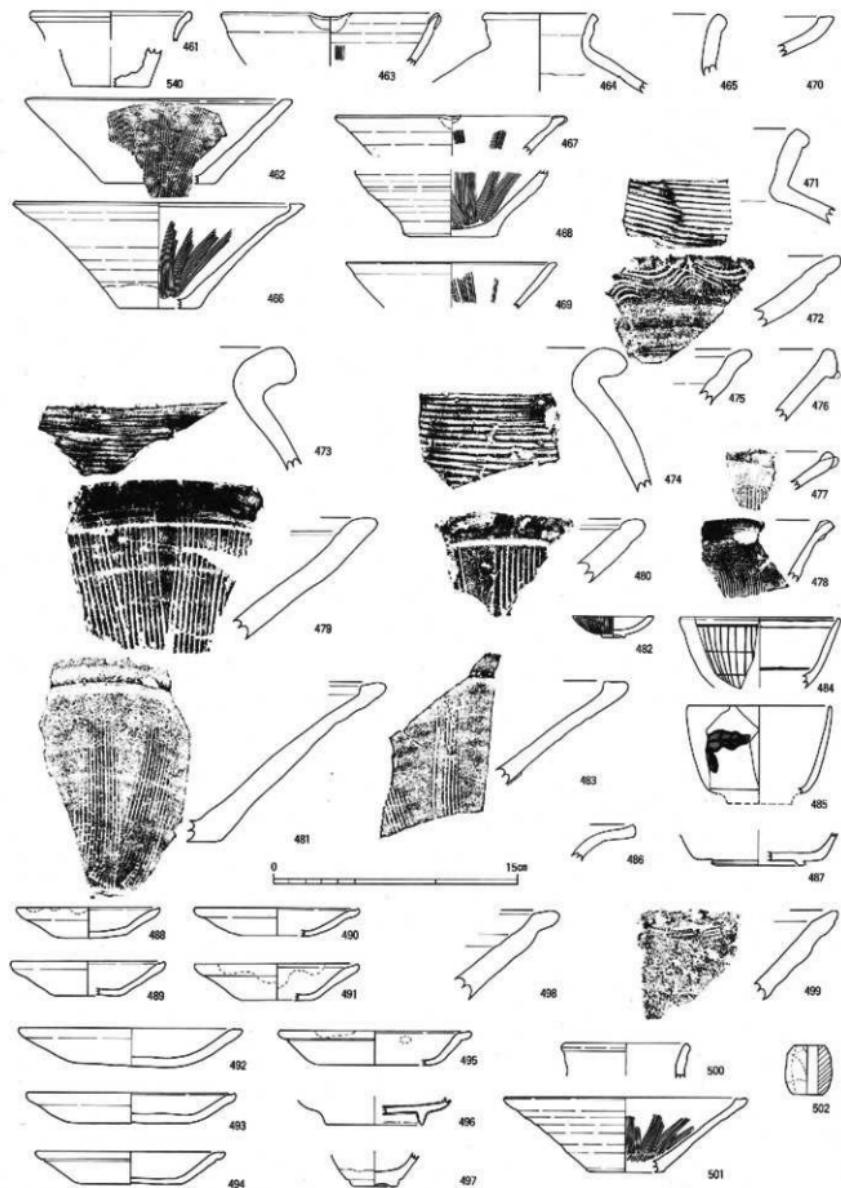


図版17 C地点6区SD1001出土遺物(4) 1/3 388±1/6 394± SD1205出土



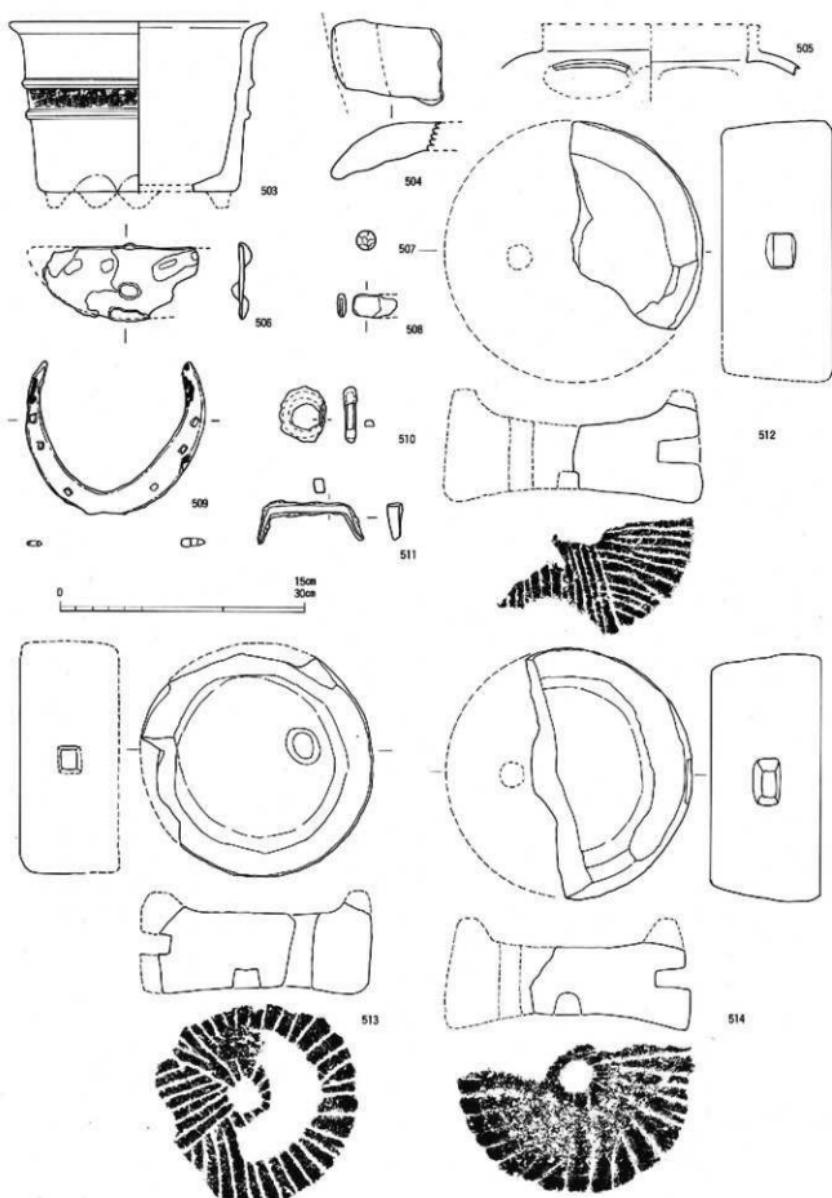
図版18 C地点6区出土遺物(1) 1/3

SD1001(425・446) SD1007(419) SD1009(395～397) SK1010(420) SD1018(398～402・441・443・448) SK1021(450)
 SD1022(406) SK1024(444) SD1026(416・417) SD1203(407～410・432・456・458) SD1204(411・414・415・440)
 SD1211(439) P4(433) P21(449) P38(413)

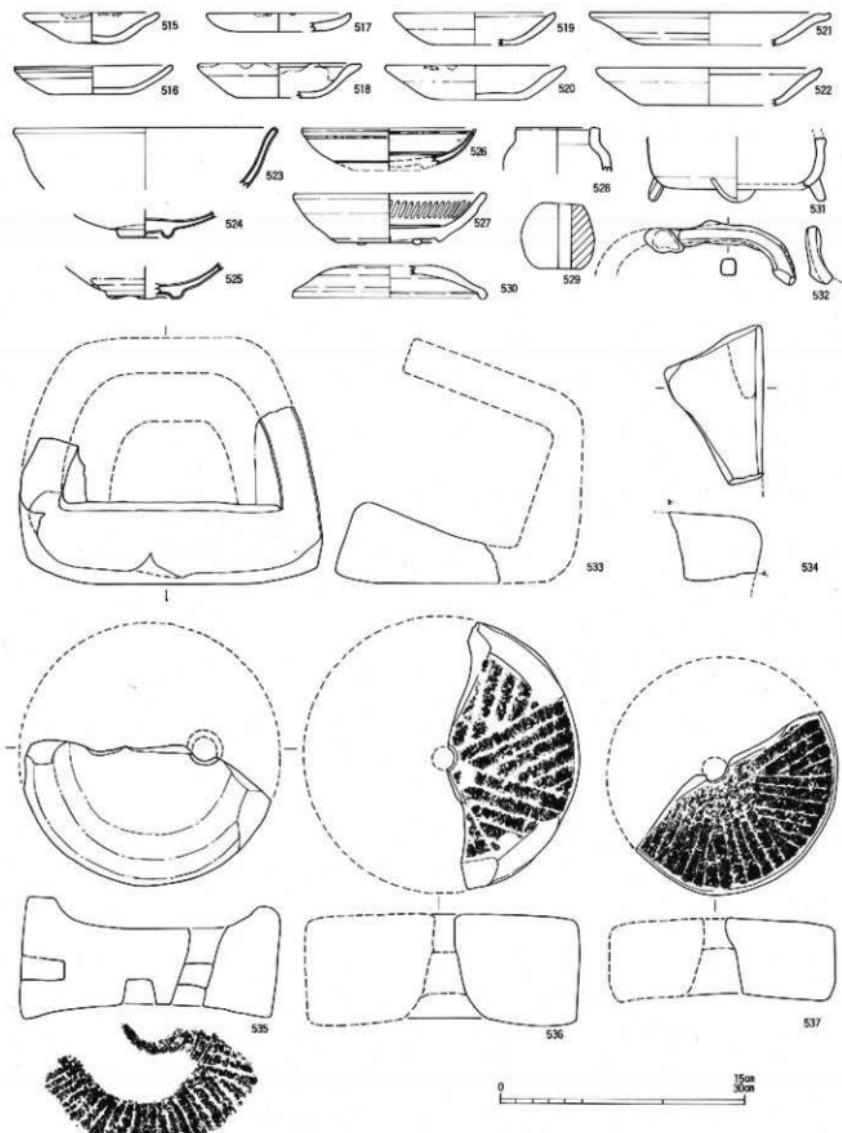


図版19 C地点6区出土遺物(2) 1/3

SD1002(471・488~502) SD1007(464) SK1021(462・481) SK1025(461) SD1035(463) SD1203(466・483)
SD1204(472・540) P24(479)



図版20 C地点6区出土遺物(3) 1/3 512~514は1/6
SK1014(512~514) SK1021(511) SD1006(506) SD1203(510)



図版21 C地点7区出土遺物1/3 535~537は1/6

因数21 地点1/因山工植物1/3 533-537(176)
SK1214(520) SK1215(524) SK1219(515+525) SK1220(516) SD1211(519+526+530+535) SK1221(533)
SK1223(536) P152(521)





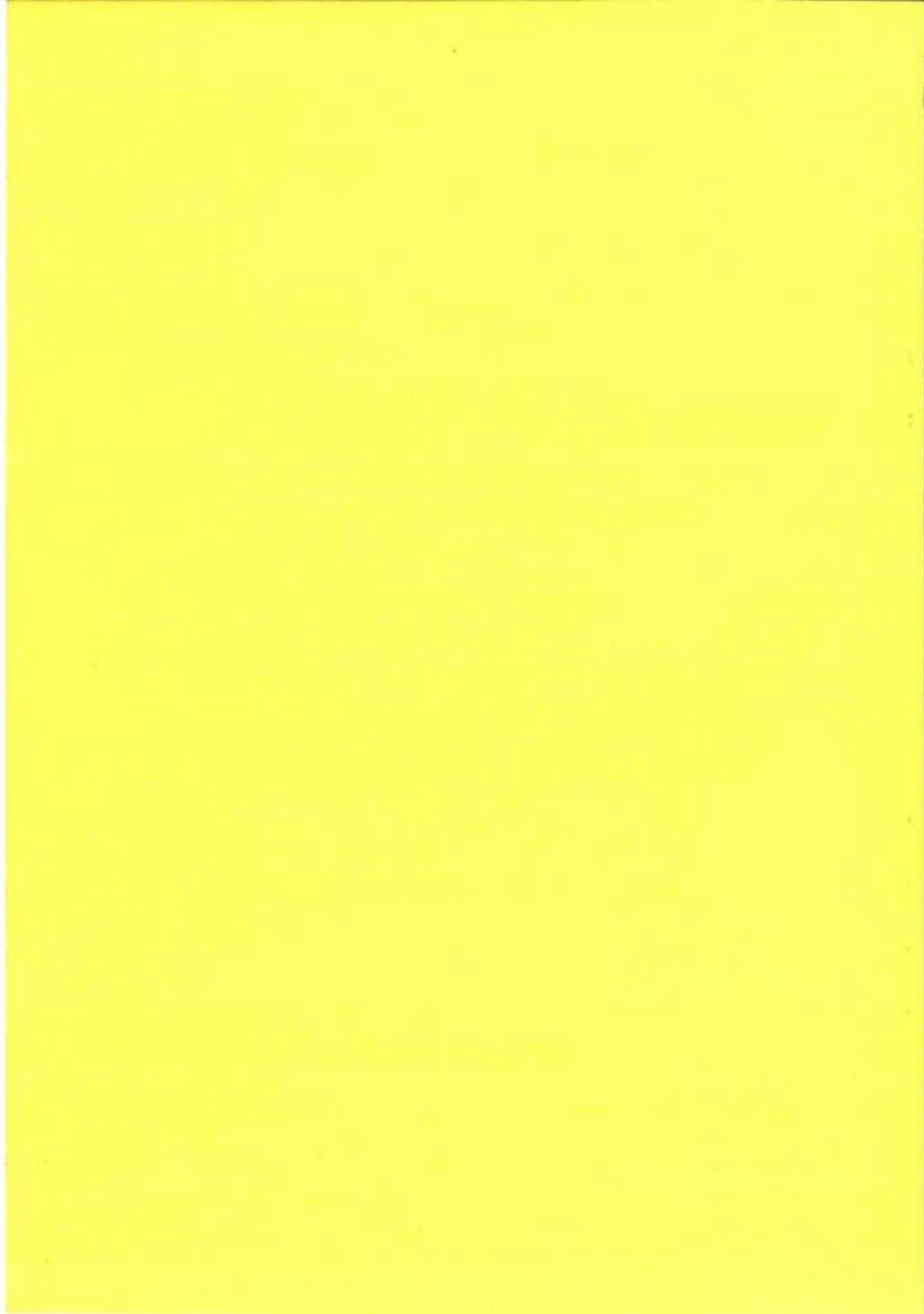
1. 全景
南上空より



2. C地点 3区
南より



3. C地点 3区
北より



図版24

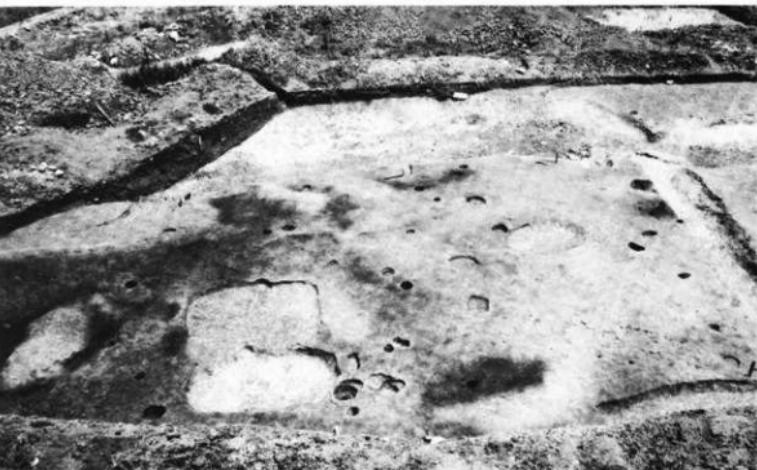
C地点4区
西側北より



C地点4区
西側北より



C地点4区
東側西より



C地点5区
東より

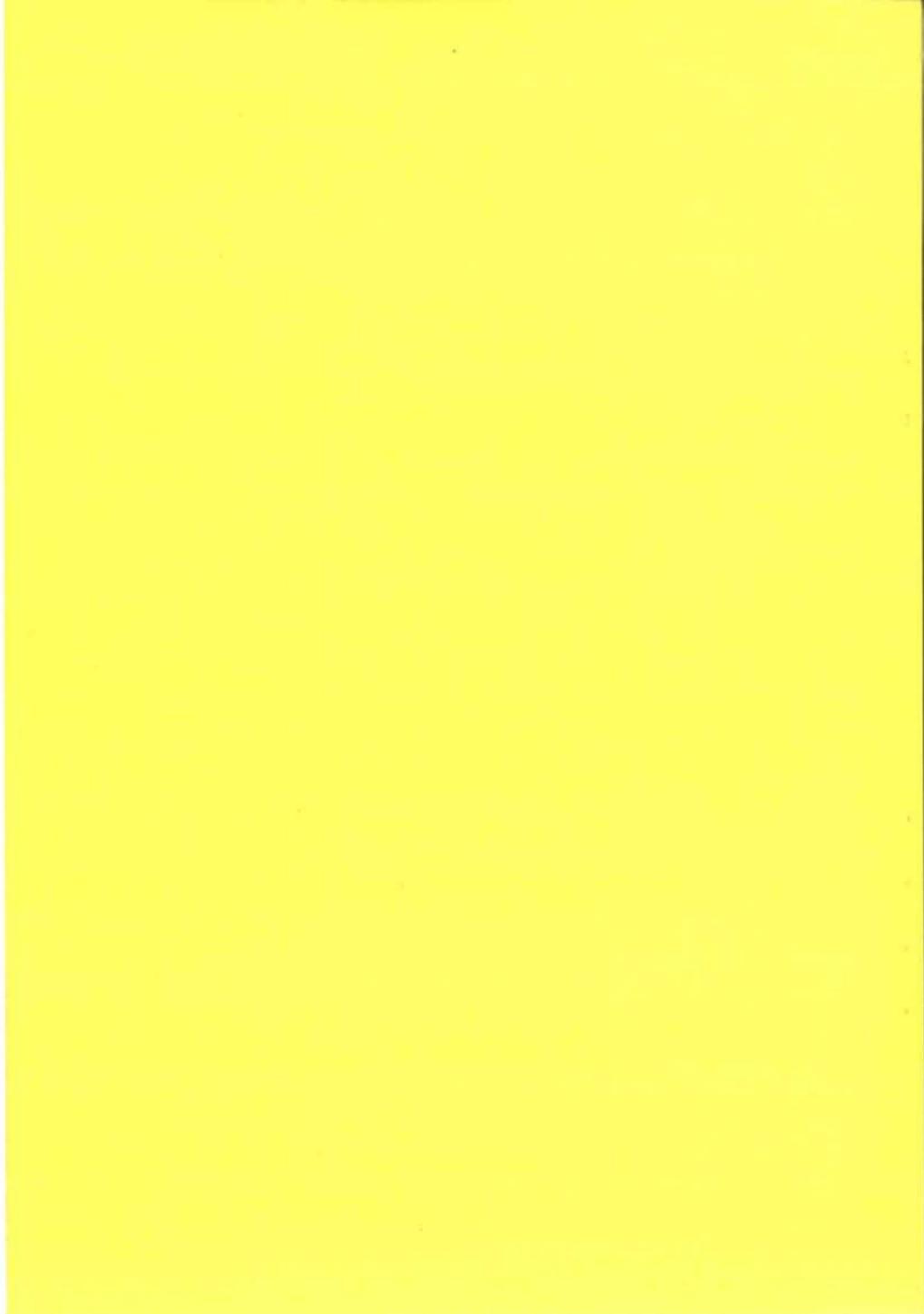


C地点5区
北より



C地点5区
南側東より





図版26

C地点6区
中央部西より



C地点6区
中央部北より



C地点6区
東側北より





C地点7区
東より



C地点7区
北より



C地点6区
西側南より

1. SD1001

発掘作業風景



2. SD1002北より

3. SD1002 6区

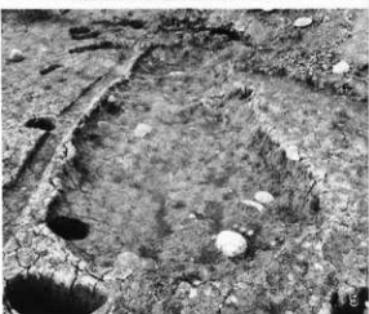
土層写真南より



4. SK1233南より

5. SK1272・1275

南西より

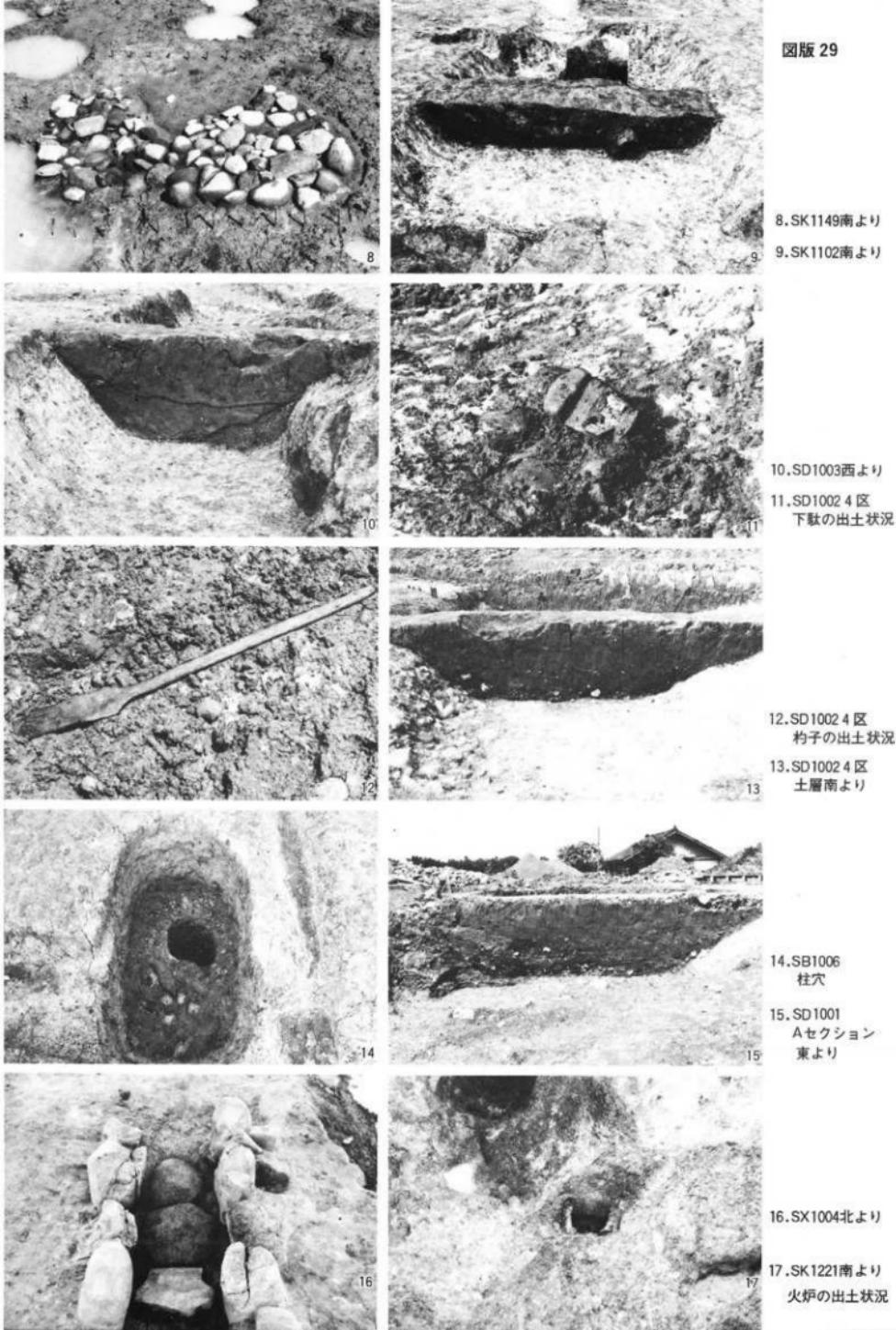


6. SD1230東より

7. SE1302

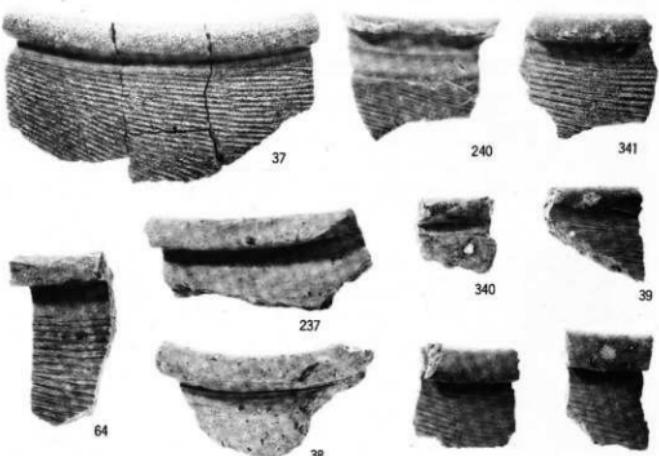


図版 29

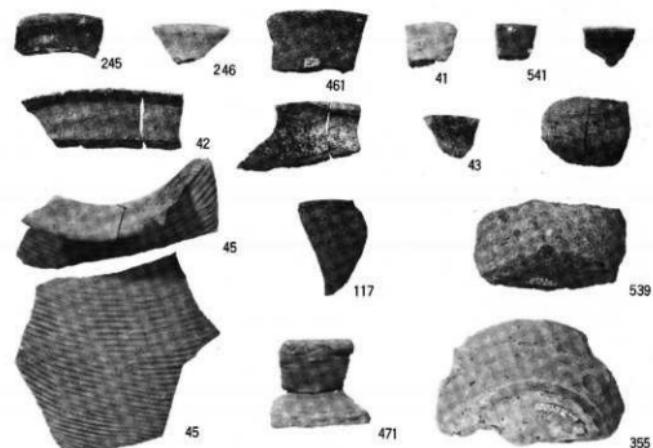


図版30

珠洲
壺



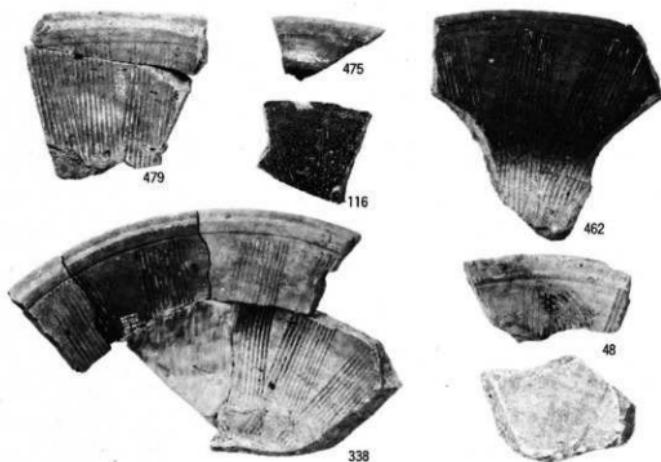
珠洲
壺



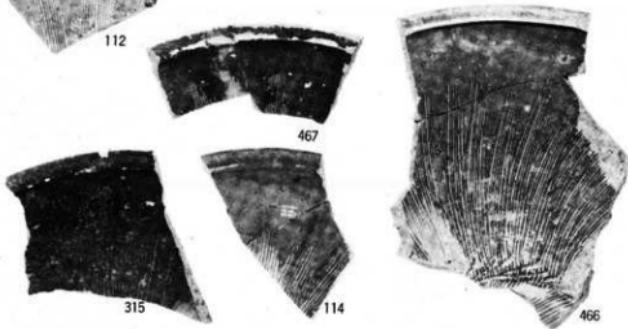
珠洲
すり鉢



越前
壺



越前
すり鉢



瀬戸美濃
すり鉢